
異世界と天才（？）

あきよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界と天才（?）

【Nコード】

N3409S

【作者名】

あきよ

【あらすじ】

天才になりたかった少女は天才になりました。
そして、美少女です。

ある日、少女は旅立ちました、一人で旅立ちました。天才だからどうにでもなると思ったからです。実際どうにでもなりました。少女はこの世界に飽きたのでどっか別の世界（異世界）にいけなかなあ?と思いました。そしたら天使が出てきて、行かしてもらいました。少女がいった所は……魔法のある世界でした。

※ギャグになるといいなあと思っています。チートを目指してます。

時々、シリアスがはいるといいなあとなっています。それでも、いいよ！という方はお読みください。　　現在、シリアスです。最初に目指したギャグはどこへ行ったー！！

プロローグ：異世界から戻ってきた天才（前書き）

よろしくお願いします。こういうの書きたいなあで書いています。
がんばりますので、よろしくお願いします。不定期更新になるかも
しれませんがよろしくお願いします。

プロローグ..異世界から戻ってきた天才

天才（自称）の少女はぜえぜえと息をしながら大きく息を吸って叫んだ。

「やっと帰ってきた――――！！」
ぐふおぐふ

！」

隣にいる少女はツツコミを入れる。

「なに、叫んでんだ！ アホか！ この馬鹿娘！」

「馬鹿じゃないモンね！天才だよ！ふははははあ！ごふ！」

正直、馬鹿にしか見え無い……

「誰がお前なんかを天才呼ぶか！ 周りから見ても、狂った馬鹿にしか見えんわ！ ドアホ！」

これはただのお笑い芸人に見えない。

ばかに見えるのは私だけでしょうか？

見えない誰かに私は問いかける。

「だれがバカだつて？」

突然、放たれるものすごい殺気。

あの……心で誰かに問いかけたんですけど……。

まさかの電波が飛んできた！！
ですか！？

怖！！

うん、何もかも心にしまいこんでると疲れてくるよね。

急に变なことをしている私がいた。なぜ……？

疲れかなあ？

まあ、いいか。

スルーしよ。自分の考えなんてどうでも言いし。

「すいませんでした。調子に乗ってしまいました」

私は一応、反省ができる人なんだよ。一応。

「謝って住むなら警察いらねえんだよ!!」

なぜ警察という言葉と組織を知っている!?

「はい……。そうですね、謝っておわりなら警察いりませんね」
なぜ警察のことを知っているかは不思議だが、空気をよんで受け答えるのが一番だね。

……さすがにKYはいやだよ。怖いもん。

「「っち！今回は特別に許してやろう、特別にな……次は………
わかってるよなあ？」」

「はっはい！すいません、お二人にお許しをもらえて光栄でございます！」

二人の少女はまさに男な性格になっていたよ。いや、男じゃないな、鬼だよ。鬼。

はあ、喋らずに無表情だったらどれだけの男が騙されることやら……？

性格は「ないな、うん」だけど、顔は整ってるからね。

「「それだけ分かってればいいんだよ……くずがあ！」」

「ひっひいひいひい！ すいませんでした！ 本当にすいませんでした！ 私はくずです。だからお許しください！」

土下座をする。謝るときのポーズで一番これが効果的と聞いたから。

鬼って怖いね。みっともない声でしまったじゃないか。

……反省？ なにそれ、おいしいの？

まあ、このことは絶対に心の奥の奥に鍵をかけてしまっておこう。ばれたら殺されるし。まだ、死にたくないし。

「あのね、神っていつまで私とお話したいわけ？」

一応、私は神なんだ。職務放棄状態だけだね。

仕事なんかやってられるかよ！！ 状態ですが……なにか？

今の彼女に答えるなら敬語は必要不可欠だよ。答える例としては、あのお話ではなく拷問です。

そして、好きだやっています。だね。

「なんか言った？」

少女から急に恐ろしいほどさめた笑顔と恐ろしいほどの軽く死ね

るよ殺気（神命名）が放たれる。

うん、心、読むのやめようか。怖いから！！ 神を殺すつもり！？

「ねえ、さっきなんていったのかなぁ？ 私に教えてほしいなぁ？」

怖い！ やめてください！ 神を怖がらせないで！ すいません

！ 謝りますから怖がらせないで！ 威厳がなくなるからあああああ！！

「はあ？ 私にはそんな事、関係ないよ」

邪悪な笑みを少女は浮かべる。

怖いよ主人公が怖いよ、助けてよ、神様助けてよぉーって私が神でしたすいません。職務放棄だけどね。神だからね？ 神様だからね？ 神様なんだからねー！！

「いまどきそんなのうけねえーんだよ、時代遅れ！」

怖いですよ、神より強い少女、あの時契約しなければこんな事には……「もう、遅いんだよ？ カミサマア」

この得に笑顔をたとえるなら、ニタアだよ。うん、怖い。

ねえなに？ 何？ あの怖さ、神（私）異常に怖いんだけど……。

しかも、どSだよ。もう、なにあれ？

何度の君たちを助けてきたのにこの仕打ちは何なんだよぉー！！

人の心を読むし、暴力振るうし。

最近の若い子はみんなこうなのかしら？

いやあ、ねえ？ 私の子はそんなものではなくてよ。……あなたの息子と違ってね……。

こわ！

この私の脳内妄想！

修羅場じゃないか！

なぜこんなことに……。

死にたいよ……。

助けてください神様……。職務放棄してない神様を求むよ。あ、私は除くよ。神様だけどちゃんと周りの天使ちゃんよろしくっ

て言ってきたから。数名に殺す！！　とか言われたけどね。

「お前なんかを助ける神様なんていないんだよ。バーカ！」

また、心、読まれたぁ！！　うわーん！！　何で人の心を読むんだよお！！

「あんたに馬鹿と言われたくないと思うけど……」

すごいですね、彼女のパートナー、あのお方にをいれるとは……さすがです。

私がつっこみを入れたら殺されるでしょう……絶対に！

ぎゃあああああああ！！　と、叫び声も上げられず殺されるでしょう。瞬殺だよ。一瞬で殺される。

「誰が、あいつのパートナーだって？」

相方の少女から殺気が放たれる。とても濃密な殺気が。

そして私はまた心を読まれていることを自覚。

いやー空は青いね……いやー現実逃避するとその後って怖いんだよね。

ほら、今も知らないうちに二人の鬼が金棒（一人は拳銃もう一人は剣）を持って歩いてくる。

この後、鬼からのお仕置き☆タイムが始まるのかなあ？　……こわいね。

あ、お、お、鬼が……ぎゃあああああ！！

どこかの世界で神が空を越え、宇宙を超え、世界の歴史をばらばらに砕いたらしい。

まあ、わたしだけどね。

そういえば私はよくこの数年間こんな人たちと一緒にいて死ななかつたな……。

なんか最近、人の心を読む力を手に入れたんだよなあ……。なぜだあ？

魔物を釣るためのエサにされたり、食べ物がないからといわれて食べられそうになったり……目から何か変な液体が……。よく私、死ななかつたな。

プロローグ：異世界から戻ってきた天才（後書き）

波乱万丈の始まりかもしれませんね……。

あと、ほかにも仲間（？）がいます。ただ、話についていけなくて話せなかったんです。ソレダメデスヨ？次回はどんな話になるのでしょうか？

かなり、一話修正中……

プロローグ2…旅立とうとする天才

少女は旅に出る事を決意しました。

何故か？ それは……

今から話をするから聞かないでよね！ それぐらい分かるでしょ！

では、なぜ少女が旅に出る事にしたかそれは……

私は天才になろうとした。

そして、その結果、天才になれた。

いつも、血のにじむほどの勉強をして、血のにじむほどの運動とか色々した。

そして、やっとなれた。

将来は勝ち組だぁ！ 絶対に！ と意気込んてた。

でも、それからとゆうもの天才ゆえに何もかもができてしまい暇だった……

とおおおおおおてえええええええええもおおおおおおとおおおお暇だった

まさに、天才ゆえの悩みである！（てか、自覚してる天才とかイヤだよね）

リア充がうらやましい！ 周りから見たら私はリア充かも知れない！
しかし、私はリア充などではない！ リア充ですが………何か？
のような状態ではない！ 考えてみて？ 暇は私にとって天敵みたいなものなんだよ！
いうならば、天敵に追い回されるリス状態だよ！？ どこが、リア充だよ！ 誰がリア充だよ？！ という所で……旅に出るかぁー……！

あ、親と友達に旅にでること言っとかないと……
そして、私の最後の慌ただしい1日がはじまった。

まずいいたい。

何で旅につながるのよ!! 確かに周りから見たら天才だけど、基本の性格がバカなのよね……。

あ、この子は私の守りたい人よ。

私の名前はリリカ・ルーシベルっていう周りから見たら神の使いで、ももっもちろん!羽なんか生えてないわ!元人間だしーてか、羽あったら怖いからってあたしは誰に話しかけてんのよ!しかも口調がやばい事になってたし!!もう、あの子をずっと見張ってたから、あの子のバカが移ったのかも……まさに、ある意味の天才!恐ろしいわ! どうしよお! どうしよお! バカになるなんて……一生の不覚……うう……とうなだれる私。こんなんじゃ、あの子を守れない!

こんなことしてる場合じゃない! あの子を追いかけないと!どこに行くつもり?! ……なんで、空港にいるのー?!

なっ! あ、あ、あ、あの子! 旅にでるのは分かってたけど空港の飛行機の荷物に紛れ込むなんて……

ばれるに決まってるじゃない! アホだ……バカだ……

はあー、あきれた……即、捕まって終わりよ……

ってえ! 何で? ばれてないの?! 主人公補正? 主人公補

正? 主人公補正なの? ありえないわ! ありえない! ありえ

ない! あんな子が主人公だなんて……

認めない!

回りが認めても私が認めない!

絶対に認めないわ! あの子が主人公なんて絶対に認めない!

あの子が主人公ということはトラブルに巻き込まれるじゃない!

あの子を守れないことが起こるかもしれないじゃない!!

もし、あの子が死んだら……私どうしたらいいの?

あの子がいなくなれば私は生きてなんて……いけないのに……。

ちよっと! あの子どこに行くつまりよ!

飛行機に捕まってどこに行くつまりよ! あ、あ、あの子の顔は

絶対に何も考えてないわ！

そんな顔をあの子はしてるわ！

バカだ……。

正真正銘のバカよ……。

私に心配ばかりかけさせて！ 自分をもう少し大切にしてもらいたいわ。いいえ、もう少しどころじゃあ、ないわね。とても、大切にしてもらいたいわね。

私を精神的に殺すつもり！？

はああああああ！ つと盛大に私はため息を吐いた、当たり前な反応よ！？

やっど……いや！ 絶対に！ 絶対にあの子の反応を見てたら大きなため息ぐらいつきたくなるわ！

ああ！ もう、飛行機旅立ちたわ………どうしようか？ もう、追いかけるしかないわね……。

心配ばかり、かけさせて……困ったものね。はあ。

プロローグ2：旅立とうとする天才（後書き）

みなさんどうでしたか？ それと、遅れてすいませんでした！！

読者様の広いお心で許してください。次回は・・・神様に会う天才・
・・・という題にしようと思っています。

あくまで、思っています。です、変わる可能性の方が高いですがよろしく願います・・・。（期待はあまりしないでください。期待などしないと思いますが・・・）

私の気持ちと天才（前書き）

今回のテーマはシリアスです。

私の気持ちと天才

何で食事をするために働いてるんだか……？

魔法を使えばあっ！　って言えば魔法が発動しておいしいものが食べれるのにはかねえ。

しかも、天才なだけに外国語しゃべれるなんてすごいとは思うけど、これも、あ！　って言えばえっと日本語？　だっけ？　通じるようになるのに。

バカね。

ホントに人間ってバカね。なんで人間は魔法使わないの？　神からのたった一つの贈り物なのになあ？

たった一つの贈り物ぐらい。使えばいいのに。

もしかしてこの世界の人間は魔法しらないのかしら？　おかしいわね。

でも、漫画とかなら魔法が存在するらしいけど……。

誰も信じてはいないのかしらね？　実際、私は誰にも見えない、いわゆる幽霊状態だから、（幽霊状態はもちろん魔法だけどね。足もちゃんとあるわよ）魔法使っても、一種の心霊現象でかたづけられるわ。絶対に！　まあ、魔法のことを知らない人の前で魔法を使っても騒がれるだけで何も変わらないし、私の邪魔になる。無駄な人殺しはしない主義だし。

なんで、ここ魔法使えないの？　おかしいわ？　神に聞いてみるか……不本意だけどね……しょうがない、しょうがない。

ケータイをとりだす。

どこから取り出したかというと、亜空間から。広々としてるし、なんでもしまえるから。

もちろん普通のケータイではないわよ。神様にしか、かからない不思議なケータイなわけ。

そしてこれはこの世の中すべての世界を探してもこんなケータイ

は存在しない、神にしかかけられないという、ゴミのようなケータイだから。そんなの誰が利用するか！　と思うのよね。だけどねえ、なんか急に神がきて受け取ってください！　と、このケータイを神に渡されたのよ。

知らないけど、神に用がある奴には必要なのよ。今回は持ってたラッキーとか思ったけどね。

しかも、結構、重いよねえ。そして結構大きい。

そして、装飾が結構、派手だし。違う、違う、ハデハデね。

女神像とか、くつついてんのよね。はあー。しかも、全体が本物の金でできてるし……

何度も言うけど本当に重い！　重すぎる！　そしてでかい！

さて、説明はここまでとして早速神様に電話でもかけますか……

5分後プルルル……プルル

何で5分もかかったって？　それは……

神の電話番号がやばいほど長いのよ！

お前は何をやってるんだよ！　ケータイを派手にしたり、したり、したり！

あほかあ！！　ポチ（効果音です）

「はい、もしもし私ですが……リリカさん？　あのお、リリカさん？　リリカ・ルーシィベルさん！」

「うるさいいいいいいいいい！！」

「うう、だってえ呼んでも返事してくれないんだもん。ぐすん……泣くなよ、神様なのに。」

だから神様って言うのは嫌いなんだよ。

ほかのやつはさらにゴミだけど。

「今すぐ来て場所は……まあ、分かるでしょ？」

「うん、分かった今すぐ行くよ……ぐすん」

だから、神様なんだから泣かないでよ。キモいなあ

「あ！　それと十秒以内にね「ええ！　無理だ……」言う事を聞こうか……？」

「う、うん！ 今すぐ行く！ ……怖いよう、うう」

「じゃ、10秒、数えるからそれまでにこなかったら……分かるよね……？」

「は、は、はいいいいいい！」

「いーち、にーい、さーん、しーい、ごー、ろーく、しーち、はーち、きゅーう、じゅー」ききききたよ！「お疲れ様……ちっ！」

「ねえ！ 今、舌打ちしたよね？ 「してない」絶対舌打ちしたよね

！ 「だから……してないって言ってるんだけど……聞こえないのかな？」うう……分かったよ……で用件は何？」

「単刀直入に言うわ……なんでこの世界は魔法が存在しないのかしら？」

気合をいれる。

私の勘が気合を入れとけと警報を鳴らすから。

「そ、それは……」

何かあるみたい。

あからさまな態度を示すのだから、わかりやすい神ね。

「答えなさい」

「それは、君には伝える事はできない」

「教えて」

「君には関係がない」

「あるわ！ おおありよ！」

私は今、この世界にいるわ！

この世界のことを知ろうとして何が悪いの！ 私は今この世界にいるの！

この世界にいるのだから私には聞く権利があるはずよ！

貴方には答えなければならぬという義務があるわ！

何でここまで熱くなってるのかしら？

きつと、あの子がこの世界で生活をしているからでしょうね。

愛おしい。

「はあ、君はいつも変わらないね……」

このことを誰にも言っではいけないでね……」

「分かったから、早く話さない」

「ため息つかないでよ。もう心が折れそうだよ」

ブルブルと震える神。気持ち悪い。

「さっさと話してくれる？」

イライラするわね。さっさと話さないよ。

「怖いよう、ひどいよう、殺されるよう……ぐすっ」

神の癖に泣かないでくれる？ キモイから。かなりキモイから。

「さっさと話せていつてるでしょ！」

「うん、分かった、話すよ……ぐすっ」

5分後

「そんな事があったのね」

「うん」

10分後

「何だっていうのよ！ そんな事があったなら先に……」

私は驚きを隠せなかった。

これは世界の危機？ というやつだろうか？

なぜこんな時期に……。

……運命は何を起こすつもり？

「話す前に言ったように君には関係のないことだよ？」

冷静にいわないでほしい。

私はこのことを受け入れうことがまだできていないのだから。

20分後

「ほかに隠してる事はないわね？」

神に確認をとる。

ほかに何かを隠されてたら大変だし。

といっても、私にとって情報はあれの動き。

それ以外はそこまで必要じゃない。

「うん」

「貴方でも倒せないものがあるのね」

私と神が戦ったらどっちが勝つのかしら？

「はは……本当だよ。神様にも勝てないものがあるなんてびっくりだね」

苦笑している神。

正直、辛そうにしか見えないけど。

神は何も知らない。

あの子のことを。

それは神の罪。

だけど、私はそんな神を攻めることができない。

今までのすべてが終わってしまいうだから。

あの子を助けると、守ると決めたから。

今、あの子のことを言えば、きっと、あの子は巻き込まれる。

それだけは避けなければ。

だから、あの子のことは言えない。

いえば、すべてが………終わってしまう。

「ええ、神に勝てるのはいないと思っていたわ」

私はさっきまで抱えていた不安を打ち消して答えた。

これ以上考えていても何も変わらないし、変えるつもりもない。

「あなたは私に勝てますかね？」

「さあ？ 分からないわ」

分かる訳がない。

戦ったことはある。

でも、それは殺し合いじゃない。

殺し合い。それは人を殺すためにやること。自分を生かすためにすること。それは本気で殺すという覚悟が必要だ。生半可な覚悟でやっていいものじゃない。人を殺すというのはそれ相応の責任を負わなければいけない。どんな理由でも、責任を負わなければいけない。だから、生半可な覚悟じゃない。

感情のあるものは殺すという行為で自分の持っている力を最大限に発揮する。

それは自分が知らないうちに行っていることで、時々、お前なんて本気出したら瞬殺だよ。とかいう、寒いやつもいるがあれは嘘だ。感情のあるものは知らないうちに本気をだしているのだから、きずいていないだけだ。

「まあ、そうですね」

神もそんなことは分かっている。

でも、聞いてきたのはどうしてかしら？

まあ、どうでもいいわ。

私はまだやらなければならないことがあるもの。

はやくここから抜け出さなければ。

早くあの子のところに行かないと。

「では、私は行くわね」

神に別れを言っであの子のところに転移しようとする。

何かに阻止された。

魔法を使われたわね。

「どこに行くつもりですか？」

神の瞳が私を見つめる。

何か勘ずかれた？

魔法で神の思考を読み取る……………なにかに阻まれた。

とても強力な魔法を邪魔する魔法。

これを使うということは…………。

やつぱり、勘ずかれたみたいね。

まあ、いいわ。

「あの子のところよ」

普通に答える。

「助けるつもりですか？」

神は冷静で真剣な顔で私に問いかけてくる。

「ええ」

私はあの子を守りたいし、助けたいわ。

拒絶されても私はあの子を守るわ。

あの子が死んだら私の存在する意味がないじゃない。

だから、私は助けてみせる。

どんなことをしてでも。

「それは世界のルールを破ることです」

「別にかまわないわ。これが、あの子を守るための方法なのなら私はどんなことでもしてみせる。私が消えてもあの子を守ってみせるの」

世界のルールを破ることは消滅を意味する。

消滅。それはとてもあいまいな言葉。消滅は無かったことにする。私がいたということ。私が存在していたということもすべてがなくなる。無かったことになる。

でも、それであの子を守れるというのであればどんなにいいことか。

私が死ぬことで彼女を守ることができる。助けることができる。

「私はあなたをとめます」

「どうやって？」

きかなくても分かるけど、聞いておいた。

これが最後の言葉だと思ったから。

だから、聞いた。

「戦ってとめます」

神は告げる。

強い意志を言葉を持っていた。

神の瞳は悲しみに満ちた目だったけれど、強い瞳だった。

「そう、

なら、はやく。

はじめましょう」

これは殺し合いだ。

私は声に出して伝えてないけど、この戦いを殺し合いと受け取っていることを。

だから、きっとこれで会うのは最後。話すのは最後だ。さきに言

つておく。

「……さようなら」

小さく呟いた。

さようならと。

生きてあえるのはこれで最後だから。

「さあ、はじめましょう」

神、さようなら。

私の気持ちと天才（後書き）

……やっと編集完了しました!!

戦いと天才

「さあ、はじめましょう？」

そして、私は歪な笑みを顔に浮かべる。

「そうですね……。絶対にとめます！」

そういつて先に動いく神、バカにしているのかしら？　いいえ、絶対にバカにしているわ。

私を馬鹿にしてはいけないということを教えてあげなければいけないみたいね。

久々にがんばりましょう。殺しあいだもの。

私にはあの子を守りたいって思いもあるわ。でも、殺し合いを楽しみたいという思いもあるの。

魔力弾をうってくる神。約、1000ぐらいかしら？

当たっても痛くはない。あれぐらいで痛がるのでは神と戦う事なんて無謀よ。

神は世界の駒の中でもトップクラス。あれと戦うようになるには人外の化け物か、同じ神になるかどうかしかない。私は特例の存在だけ。

まあ、たかが人が縦に並んで100人殺せるぐらいじゃあ、私は死ぬる分けないじゃない。

本当に私をバカにしているようね。殺し合いで相手を甘く見ちゃいけないのよ？　それは、命取りになるもの。

「やはり、これぐらいでは降参してくれませんか……？」

それは私を心配するような声。

それが私をいらだたせる。

まるで私はあなた、神には敵わないといわれているようだから。

「当たり前じゃない。貴方って大変よね……。女の子なのに神だなんて……」

「そうですか？　私は気に入ってますよ？　神様」

様をつけるって……、寒い奴ね。

「さて、雑談はそろそろにして続きをはじめましょうか」

そう、きつと、これが最後の会話よ。これは真剣で真面目な殺し合い。どちらかが死ぬまで続ける殺し合い……ああ、心が躍るわ……。

私って結構なバトルマニアね。

向かい合う私達。殺気があたり一面、満たしている。

普通の人間ならば気絶するくらいの量を神とリリカ・ルーシィベルはお互いに向き合ってたしている。

先に動き出したのかりリカだった。魔法で身体を強化し、光速で神を殴りかかっている。

光速という言葉に偽りもなく、光の速さで殴りかかっている。

しかし、神はリリカの攻撃をすべてかわしている。

おそらく、神も魔法で身体を強化し避けているのだろう。とりり力は思った。

「結構できるじゃない？」

「私は幼い時とは変わっているのですよ？」

といい、歪な笑みを浮かべている。

「そうね……戦っている時の貴方はやはり、尊敬に値するわ」

「君にそういつてもらえると嬉しいよ」

最も殺し合いだけどね。

と付け加えた。

「貴方と戦っている時が一番心が躍るわ」

「逆に僕は君と戦っている時が一番冷や汗がでるんだけどな……」

「いつも、私に負けていたからかしら？」

「多分そうだよ。一種のトラウマだよ……」

「神様がトラウマなんて持っていないのかしら？」

「いけないだろうね……。でも、それほど君が戦っている姿は怖いんだよ？」

「そうかしら？普通だと思うわよ？」

「自覚をしてほしいんだけどなあ・・・」

「少しペースをあげましょうか・・・」

そう、二人はずっと話しながら、殺し合いをしていたのだ。

「っと！ついていけないけどいい？」

「いいわよ。むしろ、好都合よ。これは純粋な殺し合いなんですよ・・・」

「殺す気で行かなくては純粋な殺し合いではないからね・・・」

「分かっているじゃない」

「でも、そろそろ本気を出すころだと思っようよ？」

「ええ。そうね、少し本気でいきましょうか・・・」

格段にリリカの神を殴る速さが変わる・・・。

人には絶対に見えない速さへと・・・。

「おおっと！」

「はぁ！」

リリカは神に殴りかかるのをやめ、後ろに下がった。

「次は純粋な魔法戦で行きましょう？」

「そうだね・・・そうしようか」

まるで二人は遊んでいるかのようだった。

しかし、これは本当の真剣の殺し合い・・・。

そう、ただ遊んでいるように見えるだけなのだから・・・。

二人は1000を軽くこえる数の高密度の魔力弾を作り出す、魔力弾のすべては人間に当たれば触った人間が爆発し即死するほどの魔力を込めてある。

しかし、二人はシャボン玉をつくかのようになり、少し楽しそうになり、歪な壊れた人形のような微笑みを浮かべて・・・

二人の魔力など測れるものなどいない、なぜなら二人は人間ではないのだから・・・人間を上回る魔力と身体能力を持ち、知能は人間の何兆倍。

それで、二人の魔力を測れる者など世界にあるだろうか・・・？ 答

えは否だ、当たり前と言えば当たり前だが・・・。

魔力弾を放ちはじめる神とリリカとの力の差など存在しない、神と同じ力を持っているのにリリカは神ではない、もしかしたら、神をも超える力をもつ、リリカは神ではない理由それは、神の落とし子ではないからだ・・・。

「あら？魔法戦弱くなった？」

「そういう貴方こそそうではありませんか・・・」

「そうかしら？上がった気がするんだけど・・・」

「思い込みは破滅をまねきますよ？」

「その言葉、そっくりそのまま貴方に返すわ・・・」

「後、どれくらいで決着がつくでしょう？」

「そんなの知らないわよ・・・」

知ってるものなんてどこにもないわ、永遠に続くかもしれない戦い・・・。

「そろそろ本気を出してませんか？」

「・・・貴方から言ってくるとは思わなかったわ・・・おびえていたのね・・・」

今はまだ二人は本気を出していないのだ。
力の出し惜しみというところである。

「まあ、そこは気にせずに・・・」

「いいわ、本気でいきましよう？」

始まった二人の本気の戦いにリリカと神はどうなるのだろうか？
と心を躍らせながらも冷静に、相手を殺すために戦う。

戦いと天才（後書き）

神の落とし子の事はこのあと、とても（×100）重要になってくるので今のところは説明は一切いたしません。その所はよろしく願います。

……神は私の好きな性格をしています……。

神は男だと思っていたの人はいましたか？

私はどっちにしようかなーとのんきに考えてて、男の性格無理だし！！　　いうわけで女にしました。

……途中までしか修正をしていませんが修正……8月21日

殺し合いと天才

「さあ、本気の殺し合いを始めましょう？」

はじめましょう？ その言葉で片方が生き残り、片方が死ぬ。どちらが死ぬか生きるか、それを決める戦いが始まった。

始まると同時に二人は瞬時に加速し光速をこえ、時間の流れという域に達する。

曰く、それは時を戻るということを可能にし、未来を変えることができる。

曰く、それをすればそのものは消滅する。

……世界の力によって。

リリカと神はその危険な、己を己の力で滅ぼしかねない域へと到達する。

「フフ……あははははは！」

リリカは魔力弾を雨のように作り出し、神にめがけてその魔力弾の雨を放つ。

「だから怖いんですよ」

と言い、その魔力弾、すべてを避ける神。

「誰が怖いですって！」

と、いい終わると同時に魔力弾を百放つ。
百ある魔力弾は不可解な動きをしている。
襲ってくるかわからないほどの不可解な不可解な動きである。

それが人間の目にもとどまらぬ速さで神に襲い掛かる。
しかし、簡単に神に避けられる。

神は右へ左へと動き、そのすべてを防ぐ。
その繰り返し。

「っ！」

「攻撃が外れたら舌打ちしたりどんどん怒りだすのやめてください
い！！！」

「それぐらいで怯えるなんて、貴方らしくないじゃない？」

殴りかかってくるリリカ。

「私はあなたを恐れなかった日は無かったのですが……」

リリカの攻撃を避け、魔力弾を約千うってくる神。

「私はぜんぜん怖くないわよ！　だって、こんなにも優しいんです
もの」

それをすべて避けるリリカ。

「本当に変わったわね！」

神の放つ魔力弾の10倍の数を撃つリリカ。

「何ですか？」

リリカの放つ魔力弾すべてをよけながらか答える神。

「貴方の強さに決まってるでしょ」

神を殴るリリカ。

「いてて……そうですかね？ 私には貴方の方が強くなったと思いますが……？」

リリカを蹴る神。

「っう！ ……お世辞は結構よっ！」

砲撃を打ち始めるリリカ。

「ちょっと！ いきなり砲撃はやめてくださいいい！ それとお世辞じゃないですよお！」

「全部、かわしてるのに言う！？ それと変な敬語をやめろ！ キモイから！」

「当たったら姿かたち残らず消滅しますよ！」

「消滅しろ！」

「ひどい！」

神の死角にはいるリリカそして、砲撃を放とうとする。神はリリカが後ろにいることにきずき阻止される。

「ひどいですね・・・死角を狙うなんて・・・ひどいですよ？」

「よく言うわ、きずいてたのにね。これは殺し合いよ？ ルールなんて存在しないと思うけど？ 違うかしら？」

神はきずいていた。リリカが砲撃を放とうとする時かすかに笑った

のだ。

「もし、あの時、きずいていなかったら、姿かたちなく消滅してますよ……」

「ねえ？ 貴方、性格変わってない？」

「そうかもしれないですねえー。まあ、あなたもでしょう？」

「そうかしら？ そのままで変わってないと思うけど……？」

「きずいてくださいよ……」

「貴方も、そうかも知れませんねえーっていてたじゃない！」

「そうでしたっけ？」

「とぼけないでよ……きもい！」

「ひどいですね……相変わらずですが……」

「そう、私は昔からこの性格は変わりはないわ、一生かえるつもりなんてないけど」

「性格を直してほしい所なんですけど……」

「知らないわよ。だって迷惑かけてないもの」

「かけてますよ！ 十分……！」

「だったら、ごめんね」

「全然、謝る気がないじゃないですか……」

「まあ、いいじゃない！……いつまで、こんな削り合いするの？」

「さあ？ いつまででしょう？」

「じゃあ、もうこれで終わりにしようか！ そろそろ、でかいの放てるか放てないか不安だし……」

「そうなんですか……」

「先手必勝……！」

後ろのまわり込むリリカ

「では、どうにか相殺させないといけませんね……」

二人とも最強の魔法を使うらしく呪文を唱え始める……。

「汝、世界を滅ぼす者……」

「我、ここに集いし神々の光なり……」

上がりリカ下が神。

二人の魔法は闇と光、前者の闇がリリカ後者の光が神・・・
「今、世界を混沌へと導きたまえ・・・世界に闇を・・・」

「神々の願いにより、世界に幸福と祈りの光を・・・」

「Dark world」

「Ragnar?k」

二人から溢れ出すのは光と闇の力。

光は優しく暖かく周りを光で満たす。

闇は怪しく、鈍く、周りを闇で覆う。

お互いがぶつかり合い、闇と光は調和されてゆく・・・

それを何度も繰り返し、次第に光と闇はなくなってゆく・・・

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

ほぼ全魔力を使って疲れ果てているリリカ。

一方、神は・・・

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

と、リリカと同じでほぼ全魔力を使い、疲れ果てていた・・・

よろよろと立ち上がるリリカ・・・

これは殺し合い。殺し合いはどちらかが死ぬか降参まで続けるそれがルール。

たった一つの殺し合いのルールだ。

殺し合いで相手を殺さなければ、殺し合いではなく、ただの茶番だ。
今まで、殺し合いで人を殺してきた人に失礼である・・・

神に殴りかかるリリカ・・・

「あああああああああ!!!」

その時のリリカは美しく気高い姫のようだった。最も姫はこんな事などするわけないだろうが・・・

神はよける気力もないのか・・・よけず、あたった・・・。

「ねえ、何で降参しないの?してよ・・・」

「・・・す・・・るわ・・・け・・・に・・・は・・・いき・・・ませ・・・」

・ん」

神の瞳には強く折れる事を知らない信念が宿っていた……。

「ねえ、お願い、降参をして……?」

「で……きま……せん」

弱弱しく答える神……

「何で? 何で? 何で……降参してくれないの? 私があの子と一緒に別の世界へ行けばいいのよ? それですべてが終わるのよ? なのに……なんで行かせてくれないの?」

「貴方があの方・と別の世界へ行けば……きつと……貴方は……消えてしまう……」

力を振り絞って答える神

「私が消えてもいいじゃない……私は……私は! あの子の為に死ぬるなら! 本望なの!! お願いだから……行かせて……」

「貴方が消えるのは……私がいやなんです……ずっと大切な友達でしたから……」

「友達じゃないわよ……バカ……」

こぶしをにぎるリリカ

「……私は友達だ……と思って……ました……よ?」

「だから……友達じゃないって言ってるんじゃない……」

「だったら、なぜないているのですか?」

「ないてなんかいいわ……」

リリカは涙を流していない

「いいえ、ないています。私には分かります……貴方は今、泣いています……」

「ないてなんか……ないって言ってんじゃない……黙らないと……殴るわよ……?」

殴りかかろうとするリリカ

「やっぱりやめた……だから、早く貴方も降参して……?」

「今頃、降参しても遅いですよ……もう、何も……見えないのですから……」

「そ、そんな・・・」

なみだ目になるリリカ・・・

「もうじ・・・き死ぬのでしょう・・・」

「そうかもね・・・」

「神は普通は死なないのですがね・・・」

「もう、何も言わないで・・・」

ついに大粒の涙をこぼすリリカ

「笑ってくださいよ・・・勝ったのですから・・・」

「黙れっていつてんでしょ!？」

「はい・・・いつも、貴方にはかいませんね・・・」

「お願いだから・・・黙ってよ・・・」

「・・・さような・・・ら」

「ううううううあああああああああ!!!」

泣きじゃくるリリカ

「何・・・ないて・・・いるのですか・・・」

「まだ生きてたの・・・?」

「まだ死んでませんよ・・・もうじき死にますけどね・・・」

「残りの魔力を使って貴方の治すわ・・・」

「やめてください・・・」

「・・・なんで・・・?」

「私はたくさんの人を動物を殺しました・・・我儘かもしれませんがもう、人間も動物も殺したくないのです・・・自由になりたいのです・・・」

「人間や動物は私が殺すから、死なないで」

リリカの声は震えていた。

先ほどまで、殺そうとしていたものに、死なないでといって泣き叫ぶ。

矛盾している光景だ。

しかし、その光景は、なにも知らないものから見たら、というだ

けであり、知っているものから見れば、矛盾をしていない光景だ。

「私は貴方にこれ以上誰も殺さないでほしいと願っています……殺すのは私で最後にしてくれませんか？」

「いやよ……私は貴方を殺しはしない……！貴方を私の魔力で回復するの……それで、私が死んでも貴方があの子を別の世界につれていってくれればいい……神様は人間を別の世界に連れて行っても大丈夫でしょ？」

「大丈夫ですよ……ですが私はもう誰も殺したくはないのです……」

「私は殺したうちにはいらないわ……」

「そんな事はありません……！貴方は私より優れたお方なのですから……」

「そんなことないわよ……何人もの人間を殺してきた化け物よ……」

「化け物でも私より強いのです……化け物でも……私より貴方は優れていますよ……？」

「人を化け物呼ばわりしないでよ……」

「自分で自分を化け物って呼んでいるのですからいいじゃないですか……」

「私はいけど他の奴が言うのはだめなのよ……！」

「そうなら早く言ってくださいよ……」

「次の神の落とし子はどんなお方なんでしょうかね……？」

「知らないわよ……貴方以上に使えない奴だったら。即、潰しに行くから」

まるでそれが当然のように言うリリカ。

神はため息をはき、

「かわいそうなので、やめてあげてくださいね？」

次に生まれてくるであろう次の神を心配する。

「それはそいつしだいよ」

「酷いですね」

「酷くなんてないわよ？ そいつ次第なんだから」

「はあ、だから心配なんですよ……」

「なんか言った？」

「言っていないですよ……っ！」

血は吐き出す神。

「大丈夫!？」

「大丈夫だったら血なんて吐きませんよ」

「……そうね」

「……そろそろ、死にそうなんであっち行って下さい」

「最後は見られたくない？」

「ええ、そうですよ……。一人で死なせてください」

「……分かったわ」

「あの方の所に行ったらどうですか？」

「そうね、貴方の顔は見飽きたもの」

「最後まで毒舌ですか」

「いいじゃないの。それが私なのよ」

「そうですね……っ！」

さき程とは比べ物にならない量の血を吐く神

「あっち行ってくださいよ？ 私は目が見えないからずっとそこにいるだけでいいよ？ 怒りますからね？」

「怒れる気力もないのによく言うわね」

変わらないというリリカ

「そうですか？」

「じゃあ、私はもう行くわね……」

「私はあなたの事大好きでしたよ。貴方は私のことをどう思っていましたか？」

ひとりでつぶやく神。

その瞳には悲しみが宿っていた。

「私は……ずっと貴方を守っていたかったのですよ？ 何で、分かんかったんですか？ ……貴方は……いつも、酷いお方ですね……」

一人で語りだす神。

神は自分の守りたいものを守れず、己の悲しみを必死に隠そうと必死に嘆き哀れむ。

神はいつも思っていた。

なぜ、自分は神なのだろうとなぜ自分は守りたいものを守れないのだろう、と。

強い力を手にしても、何一つとして自分の理想を願いを叶えることができないのだろうと。

いかないでほしいと。消えないでほしいと。

何度も、何度も願っては、誰にも届かず、通り過ぎてゆく。そのことに苦しみ、悲しむ。

しかし、やめなかった、自分の思いを何度見つめただろう？ こんなにも虚しく、悲しい思いを……。

血を吐き出す神。

「私は一生救われない。でも、それこそが救いなのだろう」

小さな、とても小さな声で自分に問いかけるかのように、言った。
彼女は死ぬ。

己を正義を貫徹することに悲しみを覚えながら。しかし、それすらも救いといいながら。

殺し合いと天才（後書き）

ついに神様が死んでしまいました。

殺すつもりはなかったのですけど。

でも、いつか生き返らせるつもりなんで……はい、いいわけですね。すいません。この話が一番戦闘描写がひどい……。

戦闘描写が得意な方、教えてくれませんか？

お知らせです

皆様本当に申し訳ありません・・・

パソコンが壊れてしまいました・・・

画面はほぼ暗く小説を書く事ができません・・・今は自分の指の感覚だけで打っているので、文が変な事になっていると思いますが・・・

・あまり気にしないでもらえとうれしいです今この状態で小説を書く事は不可能です・・・というか無理ですその為更新がしばらくできません・・・すいません、もしかしたら更新ができないかもしれないませんが・・・（ずっと）そうなる事はもしかしたらです。ほぼその可能性はないので・・・しかし、パソコンが壊れたのは私の管理がだめだった事にあります・・・子に世界と天才を楽しむにしていた下さってい亜もかたがた・・・本当にすいません・・・

お知らせです。

皆様にお知らせがあります！

なんと！作者あきよがパソコンを新たに買いました！！買えました！！皆様、心配をおかけしてすみませんでした。（土下座）皆様にはいつもこんなダメ×100な作者をささえてもらっています。本当にありがとうございます。これからずっと最終話まで絶対に異世界と天才を書きあげてみせます！！かきあげます！！皆様、本当に今回はごめいわくをおかけくてすみませんでした……。二れからも皆様、異世界と天才の応援してください！！よろしく願います！！

7月にしている予約掲載も大丈夫です。7月に掲載する小説は魔法少女リリカルなのはが原作です。幽霊の少女はなのはの世界でなに見て、何を決意し、何を守ろうと、何を思うのだろう……。？というかんじのシリアス少説です。

リリカと天才（前書き）

ここからはギャグに戻ります。

リリカと天才

あーもう！何でもどこにもいないのよ！！最悪よ！！神と戦かって帰ってきたら……

いないってどーゆーことよ！！

はあ、叫んでも、しょーがないし……探すか……

10分後

めんどい……

どこにいのよ……暑いし水がほしい

まあ、水なくても生きていけるけどね

まあ、ようは雰囲気！

20分後

名にこの暇さ……

30分後

いた！てゆーか、最初からこの方法で探せばよかった

リリカは魔法を使い、少女を探してワープしたのだ

あーもう！最初からこうすればよかった……

あら？あの子は……？

いた！何をやってるのかしら？

っ！なんで！なんで！あの子はお菓子を大量に食べてんのよ！！ずるじゃない！！ずるいわよ！！

リリカは超がつくほどのお菓子が好きなのである。

しかし、リリカはあまり……というか年に一回しか食べることができない、最後に食べたお菓子といえば100円ぐらいの板のようなチョコレートバレンタインデーで女性がチョコレートを使ってなにかを作る時に使う、ぞくに言う板チョコである。

おいしそー！私も食べたいー！！なにあれ！？かわいいー！！キャー！！すごい！八一トの形してる！？すごいー！！食べたいよー！！でも、食べたらもったいないわ！！

まあ、食べることできないけど……別に悲しくなんかないんだからね!!

ああ、なんか考えてるとむなしいわ……

少し泣き目なりリカ

うっさい!別に絶対に悲しくも、羨ましいしくも、悔しくもないんだから!!てゆうかまた、私、だれに話しかけてるんだろ?

「ふう〜!おいしかった♪ごちそうさま!!」

少女は約50皿分のお菓子を食べている

少女はまだ、足りないと言わんばかりに「もっと、お菓子が食べた
いよ〜!!」などといっている。一方、リリカは体育座りをして地面に指で文字を書いている「食べたい、食べたい……」とつぶやいて
「……………今、こんな事してる場合じゃ、ないじゃない!あの子を
早く別の世界へ送らないと!」

そう、言ってるーん?と腕組みをするリリカ

「どうやったら、あの子を別の世界に送れるかしら?」

10分後

「はあー」

20分後

「あー!もう!思いつかない!!」

1人で勝手に怒りだすリリカ

「ていうか、あの子なんで世界中を旅して周ってるの?」

頭に“?”を浮かべるリリカ

「えっと……確か、日本にいる時の生活に飽きたから、だったわよね?……それだわ!それよ!それ!私があの子の前に現れて、界世界に連れて行ってあげる!と言ったら「いく!」て言うかしら?もし、「いけない」言われたら困るし……この世界の危機を正直に話したら「この世界に残る」とか言うかもしれないし……言わなかったら殺すしあゝもう、なんて言おう?何にも思いつかないんだけど……あ、そーだ!私は神からの使いで、あなたを別の世界に送る事になった、とでも言えば、いーかなあ?うーん?もう、そーしよ

天然だったかしら？この子

「そんな事、どうでもいいから話をさせなさい」

なんかこの子神と似てきてるわね

だから、イラ！ときたのね

「うえー怖いよお」

「あなたの名前は？」

「私の名前は

黒羽美子って言うんだ！！」

その瞬間、私は不覚にも泣いてしまいそうになった

やっと、彼女を救う事ができると……

命をかけて救うことができると言うことに

美子……彼女は何も知らず無垢な少女。すべてを知っているはずの鍵、それはただの妄想であり願ひそして……理想。ただ一人、リリカは自分の理想に埋もれ狂い静かに願う。

リリカと天才（後書き）

J↑はだいたい」↑これです間違えている所があれば修正するので
（絶対）教えていただけるとうれしいです。

リリカと天才2

私はいつも1人だった。私のことを心配する人なんてどこにもいない。心配してくれるはずの親なんて私を守って死んだ。「幸せになつて……」と言って私1人を残して……死んだ。心配してくれる人も信用できる人いないのに幸せになれるワケがない。

誰も信用できないから親戚の人達には無愛想な子と私の目の前で言う人や育てる金も時間もないと言わわた。

本当にそんなんで幸せになれてなれる八ズがないのに……今でも考える「なんで、一緒に死なせてくれなかったの？」と、死んだ方が幸せだった。

世界には「生きてたら、いつか、きっと、幸せになれるだから、生き続けてください」とかいふ、バカげた言葉もあるけど（そういう変なことという偽善者もいるけど）私はそんなの信じない、そんなのただの幻でしかない。

願いが叶うなんて何億分の一の確率、その中で孤児が幸せになって、夢を叶える事ができる確率なんて1兆分の1もない。

今の私は親戚にたらい回しの状態だ。

いずれ、孤児院に入る（入れられる）事になるだろう。

だけど、それがどうしたというのだろう？信用する者も大切な者など、いない私にとってそんなことなど関係がない。

そう、あの子に出会うまで……

「ねえ、ここで何をやってるの？」

「・・・・・・・・え？」

過去編END

あの子とむかいあって私がずっと願っていた。

今、願いが叶う、私の願いは・・・

命をかけてあの子を守ることだから・・・

「貴方の名前は？」

「私の名前はリ・・・て、天使に名前は無いわ！」

「そうなんだ・・・じゃあ、なんて呼べばいいの？」

「・・・好きなふうに呼べばいいわ・・・」

「うーん？なんて、呼ぼう？大事な呼び名だからねえ？」

うでをくみ考えはじめる美子

「神以外の者が天使に名あたえれば私の仕える者が神ではなく、名前をつけた者になってしまおうわ・・・・・・・・・・」

「え？・・・でも、呼び名だよ？」

「神の所有物に名をつけてはならぬ・・・そして、それは呼び名も含まれるわ」

私の一応、神と知り合いだから、こういうところは結構、詳しい

「そうなんだね。知らなかった」

この話は有名な八ズんだけど・・・

「・・・そう・・・」

「でも、そんなのおかしいよ！だって！居場所がなくなっちゃおうよ！」

「・・・居場所・・・」

居場所と思える場所なんて私には存在したかしら・・・？

「うん！居場所！」

「私の居場所は神のそばしかないわ」

もちろん、ウソ。

神は・・・

彼女は死んだから・・・

「そうなんだ・・・でも、それだけじゃ、絶対に寂しいよ」

そう言って微笑みかけてくる・・・

「寂しくなどない・・・」

ずっと一人で生きてきた私にとって寂しさなど無いに等しい。

しかし、彼女は微笑んだまま

「寂しいよ。だって、居場所がたった一つなんて寂しいもん」
と言った。

話を変えるが私はそろそろ本題を言うことにした。

「界世界に行ってみない？」

と。。。。

「。。。。ええ？」

美子は少し混乱している。

「だから、異世界に行ってみない？」

やっぱり、異世界だもの。

興味あるわよね？

いい世界とはかぎらないけど。。。。「行っても。。。。いいの？」

「行ってもいいからいつてるのよ」

今ですごく疲れてきた。

何度も言ってるのに。。。

「行ってもいいならいく!!」

ふう、まあ、良かったわ。。。。

1つ気になることがあるけど。。。

「どんな世界を望むの？」

私としては魔法もなく争いもなくあれも来ない世界に行かせたいけど、あれが来ない世界なんて私は知らないし、普通の世界に行きたい。なんてあの子が言うわけがないし。

「そーだなー、やっぱり魔法とかある世界かなあ？やっぱり、楽しそうだし。。。」

やっぱり、そうよね。。。

あの子、普通の世界じゃものたりないって顔してるもの。

魔法のある世界にも平和な世界やとても、危険な世界がある。

そして、今の日本のように発展している世界やある程度発展をして

いる世界もある。

本当にある程度。

例えば移動手段で最高の速さが馬車だったり。（魔法を使わなかった場合）

そのぶん、魔法が発展していたり世界が平和であったりする。

そして、発展している世界は戦争をすればかなりの数の人間が死んだりする。あたりまえといえばあたりまえだけど・・・。

私としては前者（ある程度発展した世界）に行ってほしいけど・・・。

あの子はどの世界を望むのかしら・・・？

リリカと天才2（後書き）

更新が遅れてしかも短い・・・すみません
話がすすまない・・・

報告会とかです。

皆様PV1500を超えました。ユニークは500?ぐらいです。今までいろいろなことがありました。パソコンが壊れたよ・・・事件など・・・しかし、皆様が読んでいるというコトをはげみにいままでがんばってきました。皆様、このような駄作者の作品、小説を読んでもらい本当にありがとうございます!!感謝しても感謝しきれません・・・。話は変わりますが皆様が魔法の技名などを考えるの好きでしょうか?私は外国語100%無理なので皆様に魔法の技名を考えてもらい教えてほしいなーなどと考えています。さすが!駄作者!ですね・・・ハイ、分かります。すいません・・・なので、皆様本当に教えてください!感想に書いていただければ、けっこうです。99%の確率で採用します。できれば言葉の意味も教えていただけると嬉しいです。3話ほどおためし企画で後書きに異天(異世界と天才(?))の略です)のキャラをだしてみよう!をやります今回からです!一番最初はリリカからです!

報告会とかです。(後書き)

おためし企画／キャラ編／

「こんにちは？よろしくお願いします。作者のあきよです」

「リリカよ」

「ちょ！リリカ！これをちゃんと見てくれる人いるハズなんだから
！」

「関係ないわ。あの子さえ幸せなら他にはなにもいらないもの・・・」

「えーっですすね・・・すいません！」

「なに謝ってるの？バ力？」

「ううゝひでいよ・・・ちやくちゃんだよ・・・あたし」

「それが？」

「ううゝもういいよ」

「・・・ウザ」

「うん？どしたの？リリカ・・・？ちょ！それ！砲撃うとうとして
ない！？」

「・・・そうだけど・・・何？」

「私、神様じゃないから！死んじゃうから！！」

「死にたくないのなら防ぎ、剣を手にしなさい！」

「手加減してよ・・・」

「するわけないでしょーあんた仮にも作者なんだから」

「リリ（リリカの略）がぐれた・・・」

「・・・とにかく死ぬえ！」

「ギャーーーーー！！」

（完）

リリカ・ルーシィベル（前書き）

遅れてごめんなさいです!!

リリカ・ルーシィベル

「うーん？ やっぱり平和な所がいいなあ。あ、でもヒマになるかい」

「で、結局ドコに行きたいの？」

そこが一番の問題よね。

と心でつぶやく。

「うん！ 決めた！ 魔法のあって平和な世界にいきたい！！」

「そう」

平和な世界を選んだのね。

危険な世界を選ばなくて私としてはうれしいわ。

さて、平和で魔法のある世界のうちどれにしようかしらねえ？

だってたくさんあるんだもの！ 悩んでもいいでしょう！？

……なんで私、熱くなってるのかしら？

……どうでもいいとして、どこにしようかしら？

「私は皆が平等で笑顔で魔法もあって、誰もが幸せって言うような世界に行きたいな」

唐突に美子が言う。

………甘い

……この子は甘く、そして、現実を知らない。

だからこそ甘いといわれるのだけれど。

まあ、だからこそいえる言葉なのかもしれないけど。

でも、彼女は残酷だ。

自分の大切なものと人間以外はなんとも思っていない。彼女は自分の大切なもの以外は死んでもいいと思っっているから。

しかし、彼女は自分の守りたいものはなにが何でも守ろうとする。

死んでも、いくらそのものに傷つけられても守ろうとする。

……イライラする。

「……そんな世界は存在しないわ」

強く言い放つ。

イライラしてしょうがない。きっとこれは見苦しい嫉妬心、自分がそのなかに入っていないから、彼女に大切にされているものがうらやましくて嫉妬してる。

「なんで？」

彼女は私に聞いてくる。

何も知らないからこそ聞けるのだろう。

なら、あなたの望んでいない答えでも答えてあげる。

それで少しは現実が見えると思うから。彼女には現実を知ってもらいたいから。少しでも。

「そんなの、あたり前よ。人間の心理なんて脆く、儚いものよ。そして、人間は全員が善人じゃない。その人間が原因で人間が幸せといえなくなることもある」

そんなの少しでも現実を見ればすぐにわかる。

私は何度も見てきた。善人じゃない者達を見てきた。

だからいえる。

世の中は正義や優しさそんな甘いものだけで成り立ってはいないことを見てきた。

「そんな……」

「本当のことよ。そして、人間は他の人間の幸せを喰って自分を幸せにするもの」

「そ……んな……こと……ない……よ」

他人のことでよくここまで悲しくなれる。

だからこそ、この子は甘い、現実を知らなすぎる。

……きっと、この甘さはいつか、誰かをまきこみ、知らないうちにその誰かの幸せを喰らい、不幸せという地獄におとすだろう。

でも、そんなこと関係ない。

私の願いは彼女が幸せという天国にいればいい。

だから、そんなことはどうでもいい。

そう、どうでもいい。

だけでもやもやする。

きつと気の迷い。どうせすぐに忘れてしまうだろう。

「それでもそれを望むのなら、私は貴方をその願いに近い世界へつれていくわ」

彼女の幸せを願っているのだから、当たり前という言葉。

それでも、なにも知らない彼女には

「ありがとう、優しいんだね」

優しさの対象になるらしい。

「どの世界へ行くかは私に任せてほしいわ」

異世界のことをなにも知らない彼女に「どの世界にいきたいか、名前でもいいなさい」なんて、いってもわかるわけがないのだから、私が選ぶしかない。

「え？なんで？……ああ、そうだね。私、異世界のこと全然なのにも知らないからか」

「じゃあ、見つかったから送るわ」

そして、消えるまえに彼女に私の力をはじめとして知識を送り込む。だから、なにも心配はいらない。

だからこそ、異世界におくれる。

決まった。

この世界にしよう。

「決まったわ」

「ほんと！？じゃあ、つれてって！」

彼女は子供のように好奇心でいっぱいの瞳で見つめる

「分かったわ」

私は呪文を唱えた。

普通の転移なら呪文はいらないが、世界を騙さなければいけないので、呪文が必要なのだ。

普通の人間を異世界に送るのは禁じられているためだ。

これをするのは少し消滅するのを遅らせる為、その間に彼女に力を与えないといけないから。生きてもらう為に。

（神なら普通に送れるんだけどね。神だからこそなんだけど）

「呪文を唱え終わったわ。いまから、異世界に送るから覚悟しときなさい」

これで、私は消滅確定ね。

「エ？……か、覚悟ってどゆこと！？」

覚悟とは死ぬ覚悟、殺す覚悟のこと。

「とにかく、覚悟しとけばいいわ」

「あ、あな？！きゃ一一」

さて、私も一緒に行きますか。幽霊化しないと……

そうして、私と美子は異世界へ行った。

……私は消滅決定だけど……

さて、どういう風に私は消滅するのかしらね？

そして、私は笑みを浮かべながら、美子のあとを追いかけて転移した。

リリカ・ルーシィベル（後書き）

「始まりました。駄作者によるキャラ対話コーナー今回のゲストは……」

「美子だよ♪」

「はい、テンションたかいとシャトダウンだよ」

「ヒド！」

「はい、もうそれでテンションが高いから、シャトダウン」

「でも、作者も凄いテンション高いと思うよ？」

「美子に比べたらまだマシ」

「作者にきくけどあんまギャグじゃないけどそこらへんどうなの？」

「最初だけだよ……多分」

「多分って……あらすじともぜんぜん違う内容になっちゃてるし……」

「大丈夫、近いうちにあらすじ変更するから」

「認めるんだ」

「そりゃ、そうでしょ。だって、正しいことを否定してもなにもかわらないんだし」

「まあ、そうだよね」

「そして、ちかいうちに色々修正していくから、いつも以上にかくの遅れるかも……」

「……」

「……すいません……」

「頑張って」

「うん、できるだけはやく更新する」

「そっち、じゃなくて、べんきょ」

「ああ。そっちか。大丈夫、捨てた」

「ああ、ついに捨てたの……」

「うん」

「……ということはテストで遅れることはないの？」

「うん、絶対ない」

「……（それもどうかと思う）」

「今回は痛い目にあうことはないみたいだー」

「あれ？なにいつてるの？あるにきまつてるよ？」

「え？」

「さて、今回の拷問は……「イヤアアアア！」です」

（完）

異世界と消滅（前書き）

いつも、遅れる作者ゝo r z

異世界と消滅

私達がついた異世界は魔法あり、平和あり、国あり、ある程度の文明がある世界……

まあ、私がじきじきに選りぬいたのだから、ミスなんてあるわけがない。

あーあ、私ここで消えちゃうのかしら？それはそれで楽しみだけど、二度と生き返ることなんてできないのよね、その意味どおり、消滅なんだから。

転生することもなく、まるで最初からいなかったかのように消えてしまうのだから、誰の記憶にも残らず、忘れられ、死体すら残さず、儚い雪のように消えてしまうのだから。

別に後悔はしてない。

ただ、あの子が幸せな姿を身近で見られないのが心に少し残ってるだけで、それ以外には何にも心残りはない。

そういえば、神って死ぬと消滅するんだっけ……

……てことは何で私覚えてるの？

うーん、おかしい。

消滅を行うのは世界よね。

世界は神よりも私よりも圧倒的強さ、存在を持ってる。

……ということは、もしかして、消滅してない？彼女は消滅してないの？

ということとは……転生して、別の物として、生きているの？

何なのよ！？せっかく、消えたと思ったらこんな落ちなのかしら！もう、いやになるわね……

……ふふ、まあ、少し楽しみだわ。私の天敵というなのライバルがまだ生きているなんて……

本当に楽しみだわ

でも、私は消滅するから彼女が生きてても意味はないか……

その世界で最強となって、永遠の受け継がれるのでしょーね、最強の人間と……

さて、そろそろ消えるかもしれないし、あの子に私の今持つてる力、能力をすべて、与えないと……

いやーここすごいね。

世界の神秘ここにあり！って感じだよ。

見渡せばあたり一面一本も木が生えてない、草がぼーぼーの草原だよ。

あれ？天使さんはどこにいるんだ？

もしかして私、迷子中？

ちよっと！？マジですか！？

うえーん、こわいよー！

うん、これ演技ですよ。

ライオン一匹倒せるくらいの力は一応持つてるさ！大体の事には実力行使で対応できるよ。

……ちなみに交渉術も得意だよ。なんてったって、天才だもん！うん、私少し自重しよっか。

とにかく何が起こるかかわからないから、早く天使さん見つけておこー！本当に何が起こるかかわからないし……

10分後……

ふえーん！変な動物に囲まれたよー！！

なんかね、ライオンさんのね、顔をね、ブサイクにしてね、天使っぽい羽はえさせてね、牙を大きくしてね、うん、簡単に言うてゲームとかに出てくるキメラだよ。

それがね、一匹ブオーンと飛んで襲い掛かろうとしくるんだ。

……きもちわるう

うん、これ精神的にやばいね、本当に気持ち悪いよ
さっさとやつつけちゃお！

というわけで襲い掛かろうとしてる気持ち悪いキメラAを避けて同時に回し蹴りをした。

キメラAくんはその蹴りがあたってお亡くなりになられた。

周りのキメラが騒ぎ出す。

よっぽど、仲間を大切に行っているようだね。

なら、こっちは好都合だ。

混乱して、怒って我を忘れて襲ってきたら潰すのは簡単。

さて、どうだろうな？

ありゃ？怒ってるけど、まだ理性は失ってないらしい、もう一匹殺すかな？

私は考えるのをやめてキメラBに襲い掛かる。

キメラBの頭を殴って殺した。

罪悪感？

そんなの感じるわけがない。これは人間じゃない。ただの生物。

そして、これは正当防衛

そんなんで罪悪感なんて感じるわけがない。

所詮、私と同じ種族の生き物じゃないんだから。

あれ？完全に怒りでキメラ達は我を忘れてるね。

へっいっせいに襲い掛かってきた。

でも、そんなんじゃだめだよ。

ぜんぜんだめだよ。

つまんないよ。私が

私は襲い掛かってくるすべてのキメラを避けて、避けると同時に蹴

りと殴りかかった。

そして、五分後、すべてが終わった。

私は全身にキメラの血っぽい緑色のものを全身に浴びた。

うん、気持ち悪い。

この服お気に入りだったのに……もったいない。

まあ、いっか、天使さんをさがそう。

さて、準備もできたし、そろそろしないとやばいわね。

体の足から消えてきてるし……

早く準備に取り掛かりましょ。

よし、スタート!!

はあ、はあ

体からすごい、力が抜けていく。

そして、消える速度も早くなる。

でも、しないとあの子はこの世界で生きていけない。

だから、消えるのならあの子の役になってからじゃないと。

将来的には彼氏ができて子供もできて、幸せに暮らしているといい

わね。あの子

さてあと少しで私が消えるわ、それまでには私の力、届いていて……

ああ、私のことはすべて忘れてしまうのね。

でも、かまわない、私が消滅して、あの子が苦しむことはない。

強いふりをして残忍なあの子でも、本当はとても弱くやさしいあの子。

愛しい愛しい私の友達。

最初で最後の私の友達。

さよなら……美子

そこで私は……

消滅した

いつもの私(前書き)

2週間に一回になってきてる。ヤバ！

いつもの私

私は白い空間にいた。

本当に白い空間にいた。

本当に白いかはわからない。

……感覚がないから。

これは自分の身体なのだろうか？

これは知らない誰かの身体ではないのだろうか？

……感覚がない

恐ろしい。怖い。

自分が誰なのかわからないから。

自分はここにいるのかわからないから。

……怖い。

自分が自分ではないと思ってしまう。

怖い。

恐怖が私に襲い掛かる。

恐怖が私に牙を向ける。

恐怖が私を支配しようとする。

恐怖という自分の感情に恐怖した。

意味がわからない。でも、怖い。本当に怖い。自分が自分でいられなくなるのが。

怖い。

誰かに助けてほしい。

願っても届かない。

私は消滅したのだから。

しかし、ならばなぜ、私はここにいるのだろうか？

私は消滅した。跡形もなく。だれも私のことを覚えていない、それが消滅だからしょうがないと諦めることはできる。

でも、消滅したはずの私がなぜここにいる？

おかしい。

なんなのだろう？

これは今までのことはすべて夢だというのだろうか？

ならば誰か私を起こしてほしい。

夢なら目を覚まさしてほしい。

目を覚ましたい。

そして、この恐怖から私を助けてほしい。

誰か私に救いの手を差し伸べてほしい。

きつと、そしたらこの真っ白だけど暗い闇から抜け出せるはずだから。

助けてほしい。

でも、この言葉は私が言っている言葉じゃない。

思っていることじゃない。

だって、私はたくさんの人を殺してきたから。動物を生きているものを殺してきたから。

だから、許されない言葉だろう。思いだろう。

でも、そう思わずに入られなかった。

私の殺してきたものの中にもいただろう。

助けてと。

心で叫んだものが。

でも、私は殺してきた。

殺さなければいけなかったから。

でも、そんなのは言い訳だ。

殺したのには変わりないのだから。

だからこれは思っていることじゃない。

でも、助けてほしい。

そう願わずに入られなかった。

闇が怖いから。

助けてほしいと願わずに入られなかった。

でも、助けてもらえばきつと私の消滅はなかったことになる。

それは死んでいた人間が生き返ったのをまた死ぬことにしてしまう。
消滅は私のいなかった世界にする。

だから私が関わったことはすべてなかったことにする。

……違和感をなくすために。

誰も覚えていないのはそのためだ。

当たり前といえば当たり前だけど。

今まで殺してきた人たちが生き返って幸せになれるのならいいと思った。

結局は私も甘い。

彼女だけが大切とそれ以外はどうでもいいといっているながら結局は他のものの幸せを願っている。

甘い。

私も甘かった。

私はバカだった。

彼女は甘いと思っておきながら私も甘かった。

今までできずかなかった自分は彼女の事など言っていないわけがないのに思っていただなんてバカにもほどがある。

ねえ？ 誰か助けてくれないかしら？

こんなつまらない白い闇から、誰か助けてくれない？

そしたら、彼女をずっと見守ることができるはずなのよ。

だから誰か助けてくれない？

白い闇から……

——いいですよ——

その声は優しく、透明な女性の声だった。

私はこの声を聞いたことがある。

誰かは忘れたけど絶対にきいたことのある声だった。

懐かしいと感じた。

どんな顔立ちかはわからない。

だけどその声の主は「この闇から助けてくれるの？」と問いかけた。
はいと答えてくれた。しかし、

——私一人では行うことができません——
といった。

私には力がない。

すべてを彼女に渡したから。

きつとこの力は消えることはない。

純粹な力だから。

最初から持っていた力として世界は処理するだろう。

だから心配はない。

しかし、今の私には力がない。

運命に逆らうことができるほどの力はない。

私たちのほかには誰もいない。

……絶望。

絶望する。

この闇から抜け出せないことに。

絶望する。

力のない自分にふがいなさに。

……諦めるしかない。

そんなことを思う自分がある。でも、あきらめたらすべて終わりだとまだ道はあるはずだと思う自分がある。

でも、わかってる。諦めるしかないということは。でも、認めたくない。この白い闇から抜け出したいから。

でも、何もできない。

だから言おう。私に力はないと運命に抗う術は残っていないと。

——本当に？——

と聞いてくる。

でも、本当に運命に抗う術はないと。答えるしかない。

——あなたは誰ですか？——

と急に聞いてくる声。

「私はリリカ・ルーシィベルよ」とお答える。

——本当に？——

私は答えることができなかった。

名前を言うことはできても、答えることはできなかった。

いつもの私ならこんなところで諦めたりしないから。

あれ？いつもの私ってどんな性格をしているの？

いつもの私って誰？

……私の大切な人は誰だっけ？

……どんな名前だったけ？

急にわからなくなる。

すべてを忘れていく。

今まで生きてきた過去を記憶を。

……失いたくない。

今まで過ごしてきた記憶を思いを。

諦めるわけにはいかない。

諦めたらすべてを忘れてしまう。

私は迷ってはいけない。

迷えば思いを貫くことができなくなるから。

迷えばすべてを失ってしまうから。

……もう、私は諦めない。迷わない。

これが私の生きてきた道だから。それを否定することはしない。そ

れが私だ。それがいつもの……

リリカ・ルーシィベルよ。

いつもの私（後書き）

今回はいつもより長いね。

「よくもころしてくれましたね……」

「げっ！ 神様じゃないか！」

「なんですか！ げっ！ て！！」

「いやゝ生き返ったもんだからさ」

「あなたが生き返らせたのでしよう」

「まあ、今回あとがきのために特別にね」

「まあ、いいですよ。いつか本編で本格的に生き返るはずですから」

「それを言ってもらえるとうれしいな。まあ、生き返るかどうかは別として」

「……」

「きにすると負けだよ。負け」

「はあ」

「中途半端に終わったね」

「そうですねー」

「ひどい。まあ、いいや。今回はこれで終わり」

「少し待ってください」

「ん？」

「ラグナロク」

「へ？……ぎゃあああああ！！」

「今回でキャラ対話は終了です。皆様ありがとうございました」

「ありがとうございました」

契約（前書き）

エロが入っちゃった！
闇風の影響かも……

契約

私は迷ってはいけない、後悔したらもつといけない、そのことに初めてきずいた。

私は自分のこと全然分かっていなかった。

だめだわ……。私。

そのことに全然きずけてなかった。

いままでの私は何にも自分の事を分かっていなくて、曖昧だった。今すぐはじめよう。

こんな闇から抜け出せなくても、私のことを知ろう。

そうすれば、きっと何か見えてくるはずだから。

私は迷わずに。後悔せずに。この闇の中にいよう。

どんなにつらくても、大丈夫だから迷わないで後悔しなかったら、それだけで十分だと信じることができるから。

歩もう。

自分を探すために。

これからはきつと……

そこで私はきずいた。

これは夢だということに。

これはありえるはずのない話。

美子というような変な名前の人はいない。

リリカという名前はまだ一般的だが、彼女ほどの魔法の力を持っている人もいるわけがない。

本物の神などいるわけがない。

魔力を持っているだけでも珍しく扱うのが難しい。その為、魔力のあるものは天才と呼ばれ、魔力があり、魔法が使えるものは神と称されることもある。

そして、異世界は存在するけど魔法が存在する世界なんてここしかない。

魔法の存在する世界はここ以外には存在していない。

さて、目を覚まそう。現実に戻ろう。夢は覚めないといけないから。

……あれ？ 目がさめない？

——なぜ？

「本当に？ これはただの夢なのかしら？」
え？

だれが私に話しかけてるの？

ここにいるのは望んだ私の性格しかいないのに。

……だれ？

「私よ。リリカ・ルーシイベルよ」

……リリカ・ルーシイベル……

私の望んだ性格をした夢の中の住人。

とても強くて守りたいものだけを守る人。

彼女はきつといくつもの試練や悲しみを味わってきたのだろう。といっても、彼女は夢の中の人間。私に分かるわけがない。

でも、きつとそんなことがあったんだろう。

だからこそ自分の守りたいものしか守らないんだろう。

勇ましく、美しい人。

彼女に愛しいと感じてもらえる美子は幸せな人だ。

私にもそんな人がほしかった。誰かを愛しいと感じる人になりたかった。

「夢はなぜ覚めなければいけないのかしら？　そもそもここは本当に夢なの？」

何を言ってるんだろう？

夢は覚めなければなんだというのだろう？

現実？　これが？

ありえない。

もし、これが夢でなかったとしたら一体なのだというの？

「現実よ」

リリカが唐突にありえない言葉を告げる。

ありえない。

これはただの夢だ。

現実なんてありえない。

「ありえないなんてことは世界に存在しないわ
む……。」

私の考えてることが分かっているかのように的確に話しかけてくる。私の考えていることがすべて分かっているようで私はリリカが怖い。

でも、ありえないなんて存在しないということはない。

しかし、信じることができない。

これはただの幻だから。

何で夢は目覚めないのだろう？

今日はいい夢だった。途中まで。

しかし、これで台無しだ。

こんな終わり方では明るすぎる。

意味が分からないといっても過言じゃないほどに。

「あなたは何を望むの？」

急にリリカが告げる。

私はこの現実から抜け出したいと願うだけ。

腐った世界。

それが私の言う現実だ。

他人などどうでもよい。

自分さえよければよい。

それがこの国の人間たち。

腐った人たち。

壊れてゆがんだ世界。

歪んだ人格の人間達。

自己中心の世界。

自己中心的な人間達。

それが私の言う現実。

私の家はお金持ちで、いろいろな世界へつれまわされる。

そこはどこも自分中心で周りのことなど考えていない。

金持ちには道を譲り、ありがとうという意味で道を譲った者に金を渡される。

しかし、金を出せないような貧乏者には道を譲らず、わざとぶつかり文句をいい、殺す。

そんな世界。

歪んで壊れた世界。

腐った世界。

腐った人間達。

誰がこんな世界を作ったのだろうか？

誰がこの世界を腐らせた？

そんなのいまさら知っても意味はない。

でも、聞きたくなる。

なぜこんな歪んで壊れたような腐った世界を作った？ と

でも、そんな世界でも現実なのだから生きていかなくてはいいけない。

もし、どこか平和で幸せな世界があるのなら、私はその世界に行きたい。

そんな世界で幸せになりたい。

「あなたは何を望む？何を願う？」

夢の中だからいえる言葉。

それは……

「平和で幸せな世界に行きたい」

きつとこの言葉をお父様やお母様に言えば殺される。

「この国の恥」といって。

私は死にたくない。

こんな世界でもいいから生き続けたい。

強欲かもしれない。

でも、いいじゃないか。

私は周りになんていわれようが生きたい。

ただ、それだけ。

でも、できることなら。

誰かが手をさしのべてくれるなら。

幸せになるための手をさしのべてくれるなら。

掴む。

その手を掴もう。

どんな手だってそれが幸せになるための条件ならどんな汚い道でも歩いていこう。

「それがあなたの願い？」

「ええ、そう」

「そう」

彼女が手をさしのべてくれるなら、私はその手をとろう。

幸せの条件になるならその手をとろう。掴もう。

どんな道でも歩んで見せよう。

ただの夢という幻だけどそんなことを願う。
幸せがほしいから。

ずっと夢に描いていたことだから。

「なら、あなたの望む世界へ連れって行ってもいいかしら？」
今、なんていった？

私の願った幸せで平和な世界へ連れて行く？
本当に？

夢だけど……。

でも、願う。

夢の世界なら何を言ってもいい。

誰も聞いていないから。

現実の世界では誰も知らないから。私の夢、願い。

だから何を言ってもいいんだ。

なら、私の思いをうちかけよう。

「……行きたい！　だってそれが私の願いなんだから！！」

「なら。私と契約をして。そうすれば行けるわ」

……契約？

まあ、いいとして。

使い魔と契約するしたいして不思議なことじゃない。

でも、人間と契約？

そんなの聞いたことがない。

人間は思考がある。

人間はその思考により使い魔に向いているといわれているが、その思考を制御するのに膨大な魔力が必要になる。

できるわけがない。

私は魔法が使えても平均より下だ。

最上級の魔法使いでもできないことだ。人間との契約は。

人間では圧倒的に魔力が足りなすぎる。

魔法が使えなければ人間は弱い。

思考があり力もあるのが最高の使い魔といれているが、人間は力

が弱すぎる。

故に誰も人間を使い魔にしない。

そして、一番の問題として契約の仕方もあるから。

一般的には召喚して使い魔の魔方陣をつくりその魔方陣の上で呪文のようなものを唱える。

汝、かの者と契約を……

というようなやつだ。

「契約って何するの？」

「繋がりを持つことよ」

「……え？」

……繋がり。

ってあの？

女の子同士でやれと？

無理！！

まあ、私落ち着いて……

「繋がりって……あの？」

「ええ」

笑顔を浮かべて言うことじゃない！！

「繋がりってどんな風に？」

「簡単なものとキスよ」

「キ、キ、キス！？」

「ええ」

何でそんなに平然としていられるの！？

「あ、ディープのほうね」

いや、いや、いやああああ！！！！！！

「で、あなたは異世界へ行くことを望む？望まない？」

そ、そうだったわ。

異世界へ行くか行かないか。

しかもここは夢よ。

何をしても誰も見てないし、これは幻なの。

だったら大丈夫よね？

少しやってみたいし……

私！なんてことを思ってるの！？

変態！変態！私の変態！！

まあ、いいわ。

全部幻なんだから。

「望む」

「では、契約の証としてキスを……」

恥ずかしい。

でも、誰も見ていないのよ！！

がんばりなさい！

幻なのよ！ 誰も見れないし見ないのよ！！

と心の中で思っただけ冷静さを保つ。

冷静になった私は平然とリカの唇にキスする。

「ちゅう……あ、はあ……ふう……」

ほんの数秒ぐらいリカとキスする。

「はあ……契約完了よ」

リカが告げる。

そう告げるリカはどこか嬉しそうだった。

美人の嬉しそうな顔は絵になるなとか思いつつもなぜ嬉しそうな

感じかはなぜだろう。

なぜ？

「我が主、命令を」

はは、契約したんだからこうなることは当たり前か。

まあ、ルールだからしょうがないよね。

使い魔としてのルールこれはなんにでも当てはまるらしい。

1. 主には絶対の忠誠を誓うこと。

など……いろいろ

「なんて呼べばいい？」

「リカと呼んでいただければ幸いです」

「じゃあ、リリカ。あなたは魔力はある？力は？」

「あります」

一度リリカが言葉を区切る。

「私は主の使い魔です。この契約方法では契約した使い魔は主と同等の力を得るのです」

「そんなことありえない。使い魔が主によって力が変わるなんて聞いたことがない」

召喚し使い魔を呼び契約をしても、使い魔の強さは召喚したときと変わらない。

それが当たり前だ。

だから、人間を使い魔にしない。

それができたらかなりの数の人間が使い魔になるだろう。

「それは主が生まれながら特別だからです。詳しく言えば、ほかの方でもできますが、行おうとすれば死にます」

また、リリカが言葉を区切る。

死ぬって……恐ろしい！ リリカ、私が死んだらどうするつもりだった？

「そして、主は特別だからこそ強い。特別だからこそなせることです。」

だからこそ、私も主と同等の力を持ち、強さを持っているのです」

と、告げるリリカは勇ましく騎士のようだった。

いや、騎士というより女王かな？

やっぱり、美人は何をしても絵になるね。

しかし、私はそこまで強くない。

魔力は平均以下、体力は4〜5才の子と走って負ける自信がある。
「そう」

いろいろ疑問があるけど、これ以上何を聞いてもよく分からないだろうし、第一これは夢だし、気にせずに行くことにした。

「私をどこに連れて行ってくれるの？リリカ」

一応私はお嬢様と呼ばれる部類なので命令とかには慣れてる。

簡単に命令とかできる。

お嬢様だからって料理くらい簡単にできるし、大体の家事はできるように執事や侍女に仕込まれてる。

大変だった。

お嫁様になったとき恥をかかなくてもいいようにとか……正直、めんどい。

「主が望んだ世界です」

「……そうだったね。私が望んだ世界に連れて行ってくれるんだよね」

少々、愚痴ってたら反応が遅れてしまった。

「はい。では今から転移の準備をいたします」

魔法陣らしきものが浮かぶ。

らしきとは、私はこんな大きく、よく分からない文字で書かれえているためだ、その為、分からない。

「では、転移しますが準備は大丈夫でしょうか？」

「ええ」

白い空間で二人の少女が転移した。

白い空間には一人の少女がいた。

黒く長い髪、闇のように黒い大きな瞳、整った顔立ち。

その、少女の顔には大切なものを見守るかのよな穏やかでやさしい微笑が浮かんでいた。

「……良かった……」

一人、少女はつぶやく。

そして、その少女は消えた。

まるで、誰もいなかったかのように。

それはただの幻であるかのように。

そこに残るのは白くどこまでも続くような真っ白な空間だけだった。

契約（後書き）

いきなり話が変わるぜ！という話でした。
ついていけなかった人にはごめんなさい。

あらすじではさ、女の子は異世界へ言ったけどね、本当だよ。
ただ、出てくる出番がないだけなのさ。

新登場のこの子はチートオブチート（最強）なのさ。
故に孤独（？）なんです。（不思議ちゃんでもある）
がんばれ！！

あーリリカさん勝手に動かないでくれ。

次回、それは異世界！？です。（多分）題名違います。変わります。
……ちなみに新キャラちゃんが幸せ？を手に入れるところまでが第一章です。

宇宙の中の世界で人間とかがいるのを異世界と新キャラちゃんのいる世界ではそういいいます。リリカの中では宇宙を超えて別の世界を異世界といいます。いつか設定集を作るのでそれを見ていただければ幸いです。新キャラちゃんのリリカの言う異世界へ行っても大丈夫です。特別なんで。

……新キャラちゃんの口調修正……

私の中に……いない（前書き）

遅れてすみませんでした!!

私の中に……いない

私たちは異世界について。

周りを草原で囲まれていて、とてもきれいだった。

空にある太陽が私たちを照りつけてくる。少し暑い。

とても平和そうな世界だなあ。

リリカを見るとリリカは私が見ていることにきずくと私を見て微笑む。

美人だなあ。

リリカは今まで一人で過ごしてきたのかな？

「リリカは私の使い魔になるまでずっと一人だった？」

「はい」

リリカの美貌目当てによってくる男たちは後を立たないと思うけど、大丈夫だったんだろうか？

リリカは強いから大丈夫だと思うけど。

「リリカは使い魔と使い魔でないリリカどっちがいい？」

私はリリカに使い魔ではなく、ただのリリカとして生きてもらいたい。

でも、それは私が勝手に決めていいことじゃないから問いかける。

私はほんの少しだけしか一緒にいなかったけど、リリカには使い魔じゃなくて、自由に生きてるのが似合うと思う。リリカは誰かに支配されたりするのは似合わない。

リリカの使い魔になる前の雰囲気は女王。彼女は人を支配することも好まないのが女王でもないか。

しかし、リリカはとにかく、上に立つ人だ。世界の頂点ともいえる。そんな雰囲気を纏っている。だからリリカは誰かに支配されるような人じゃないし、支配していい人じゃない。すくなくとも、私はそう思ってる。リリカのことを。

「主が決めてください」

さすが、主に忠誠を誓う使い魔。というか、さすがルールとしか言いようがない。

このルールは嫌いだ。使い魔の気持ちを考えないから。大嫌い。「私は使い魔でないリリカ・ルーシィベルに聞く」

言葉を区切る。だってそっちのほうがいいし、威厳があると思うから。

私が聞いていることは大事なこと。私の中では一番重要なこと。

「リリカ・ルーシィベルあなたは使い魔とただのリリカ・ルーシィベルどっちがいい？」

「つまりは………こういうことでしょう？」

雰囲気が変わる。

それは騎士のような忠誠的な雰囲気ではなく、気品のある上品で上に立つ者の雰囲気。

汗が私の頬を伝う。リリカの持つ雰囲気によって。私は彼女に恐怖を感じているのか？ わからない。でも、たぶん私は彼女を恐れているのだ。

「……うん」

反応が少し遅れた。

「そう、それはよかったわ」

言葉一つ一つが私を棘でさす。

リリカはきずいていないだろうが、リリカの言葉一つ一つが棘を持っている。

プレッシャーを感じさせる。そんな棘。私では地に立って喋っているだけで精一杯だ。

「私は……そうね、ただのリリカがいいわ」
「良かった」

嬉しい。リリカがそう思っていてくれて。これなら私の願いも叶ってるからリリカを使い魔という鎖から開放できる。

使い魔との契約は召喚の魔方陣で使い魔になるものを召喚し、契約をする。大雑把に言えばこんなものだ。

少し原理を詳しくすると、召喚の魔方陣が使い魔となるものを呼び出す。

しかし、使い魔となるものは何も知らずに勝手に連れて行かれる。使い魔の主となるものも同じで何が使い魔になるかは知らない。

契約をする。

何が出てきてもその出てきたものと契約をしなければいけない。

使い魔を呼び出して契約をするときのルールで破れば国から追い出されたり殺されたりなど罰を受ける。（お仕置きというものだ）

契約をすると使い魔と主は見えない何か（赤い糸っぽいもの）で繋がれているため言葉がわからない相手でも言いたいことが伝わる。それは伝えたいと思ったときだけでそれ以外は発動しない。

契約を解除するには使い魔が主の願いを一つ叶える必要があり、どうしても使い魔をやりたくないものは解除する。たとえば主が嫌がっても主の願いをかなえた使い魔にはその権利があるため絶対にしなくてはならない。これも、使い魔と主の絶対守らなければならぬルールだ。

例外として使い魔が絶対に叶えられない願いを主に言われたら国に意見を求め無理と認められた場合だけ、解除できる。吸血鬼が血を吸わなければ死んでしまうのだが、吸血鬼に血を吸うなど言ったりすることなどが例だ。

「何でかしら？」

「何が？」

「何であなたが良かったなどといったからなぜ？　と聞いたのよ」

「私はリリカに幸せになってほしい。」

それはただのリリカとして、使い魔ではないリリカ・ルーシィベ
ルとして。

でも、リリカの幸せは私が勝手に決めていいわけじゃない。

だから、どっちがいいと聞いたときにリリカがただのリリカを望んだから良かったって言った」

「あなたにそう思ってもらえるなんて光栄ね」

「私をまるであなたより強い見たいに言わないで」

イラつく、リリカのほうが絶対に強いのにそんなこと言わないで。

「あなたのほうが十分強いわよ」

「どこが……」

たった一つのことを極めてもリリカにはぜんぜん敵わない。戦ったことはない。でも、わかる。

彼女は私より戦場に立っているだろうし、人生経験だって劣っている。その気になれば私を殺せる。

私がリリカを殺そうとすれば戸惑う、いくら殺せる程の力があつたとしても戸惑い、殺られる。

いくら力があつても感情を殺し、冷酷になれば殺される。

なによりも、経験だ。お爺さんと少年では同じ内容を話してもどちらが説得力があるとすれば何年も過ごしてきたお爺さんが勝るというように。経験の差は——大きく関わる——その経験の差が圧倒的に私とリリカの間に溝を作っている。

それだけの大きな差があつて私が強い？ それは私を過大評価しすぎだ。それが無性にイラつく。

子供っぽいかも知れないけどイラつくものはイラつくし、隠す気などない。

隠したところで相手はリリカ……きずくに決まつてる。それも私をイラつかせる材料になつてるけど。

最初、話していた頃みたいにリリカの言葉の棘には（今もあるけど）もう何も感じない。慣れた。人間慣れが肝心だから。

私は馬鹿にされるのはまだ許せる。

だけど、変に過大評価するのはいやだ。大嫌いだ。弱いといわれるのもいやだけど、過大評価のほうが嫌い。……私は子供っぽいなあ。

「あなたはすべてを忘れているだけ、記憶を封じられただけ」

リリカは急に悲しそうな瞳を言う。

リリカが不思議なことを言う。

「何を言っているの？ リリカ」

「何もかも忘れたのね。クラウド、あなたは忘れないといったのに。どうして、忘れたの？」

リリカは悲しそうに独り言のように語る。

クラウド？ 誰？ リリカは何を言っている？

「クラウドって誰？」

「それすらも忘れたのね。あなたは最強で罪深いひと……」
きつとこれもクラウドという人の話。

リリカはきつとこのクラウドという人を愛していたのだろう。
でも、クラウドという人が私に関係があるのだろうか？

誰かと重ねられている？

リリカも？

リリカも誰かと私を重ねるの？

……やめて。

誰かとまた重ねないで。

もう、私を傷つけないで。

私を殺さないで。

私を一人にしないで。

「また、私を誰かと重ねるの……？」

「誰もあなたと誰かを重ねてはいないわ。あなたはあなたなのだから。クラウドはあなたなのよ」

「それを重ねてるって言う」

その言葉は矛盾してる。

私は私だ。ほかの誰でもないはずなんだ。クラウドと言う人は誰？
私の中にクラウドはいない。私の中は私だけだ。

「クラウドはだれなの？」

「あなたよ。さっき言ったじゃない」

「違う！ 私は私だ！ 私の中にクラウドはいない！！」
リリカの顔に驚愕に似たような表情が浮かぶ。

「なら、昔話をしましょう。そうすれば、あなたのなかにはクラウド

スがいることがわかるわ」
「昔話……？」

私の中に……いない（後書き）

中途半端です。

早く投稿しなければ！ で早く中途半端になってしまいました。次回
回は中途半端ではないかもしれませんが、短いことが予想されます。
すいません。

遅れてすいませんでした！！

題名だけ変更……

クラウドと特別の歴史（前書き）

遅れてしまつてすいませんでした！！

今回は長いです。（今のところこの話が最長です）
すいませんでした！！

クラウドと特別の歴史

神は人間を恐れた。

人間の持つっている無限の可能性を。

人間の持つ無限の可能性は神を超えることができるものだったから。

神がそれにきずく前の人間達は寿命など存在しなかった。

人間は病気、殺人などの寿命が関係ないことで死ぬのが当たり前だった。

人間に寿命はないが、衰えというものはあった。

ただ、長く永遠に生きられるだけ。

人間はある魔法を使うことができたなら、若々しさというものをその魔法を行うことができる限り、若々しさを保つことができた。

そんな人間達に神は寿命を与えた。

恐ろしかったから。

人間の持つ、無限の可能性で殺されないか、と。

人間には神からの贈り物といって、寿命を与えた。

人間は神からの贈り物に喜び、歓喜した。贈り物の真の意味には気づかずに。

神からの贈り物は三つ目だった。

一つ目は人間という種族を作ったこと。

二つ目は魔法を使えるようにしたこと。

三つ目は……人間に寿命を与えることだった。

神は安堵した。

己を滅ぼされる可能性はないと。

しかし、それは一時だけの安心だった。

神はそれでもまた恐れたのだ。

人間に滅ぼされるのではないかと。

神は作った。

特別な人間を。

戦闘に関しては人間ではかなわないものを。

神同等の力を持っている特別な人間は神に恐れられもしたが、脳にあることを組み込むことで支配し、命令することによって人間を殺させた。

それは、神の命令に必ず従うということだった。

呪いのようなもの。

それを神は特別な人間の頭に組み込んだ。

特別な人間を神は奴隷のように扱った。

神は特別な人間で大勢の人間を殺させた。

殺された人間は罪人や強いと言われている者だった。

特別な人間達は恨まれた。人間に。

「なぜ、我々の同士を殺した。我が同士よ」

と、いわれ、特別な人間は孤独になった。

死のうとしたものもいた。

殺したくないと叫んだものがいた。

悲しむ人間がいた。

しかし、神は彼らの声を聞いても、何もせず、己の駒として使い続けた。……寿命を向かえ死ぬまで。

特別な人間達は神を恨んだ。

逆らおうとしても逆らえない。

殺そうとしても殺すことが出来ない。

脳がそれを否定し、体が動かなくなる。

それが特別にした人間への枷。

特別な人間は望んでこの力を手に入れたわけではない。

なのに、なぜ、自分達はこんな恐ろしいほど強大な力を手に入れ、仲間を殺さなければならぬ。

神はなぜ、我々を選んだのだ？

神はなぜ、仲間を殺させる？

彼らは皆、神を恨み、殺そうとした。

出来なかった。

それが出来ない。

神を殺すことが出来ないのが彼ら。

神を一番恨んでいるのが彼ら。

彼らは皆、愛するものがいた。

彼らは皆、優しいかった。

でも、それはただの彼らを理解したときに言える言葉であり、理解しなければ言えない、言っではいけない言葉。

彼らは特別。

故に一人。

故に最強ともいえる力を持つ。

それが彼ら。

それが私の愛したクラウド。

クラウド。

彼は最強だった。

故に孤独。

でも、彼は一人じゃなかった。

私が彼のずっとそばにいたから。

私は生まれながら勇者。

そんなどうでもいいレッテルを貼られたただの人間。

逃げ出した。

国から。

人から。

自分の力から。

そんなときに出会った。

彼に。クラウドに。

ボロボロの茶色いコートを着て、真っ黒でぼさぼさな髪をして弱そうなクラウドにでも、弱そうなクラウドは強くて。

そんなクラウドと一緒に旅をすることになって。

一緒にいると楽しかった。

あのときの私は神にはかなわなかった。

そんな私は当然、神同等の力を持っている彼の足手まといだったけど。

彼は私をただの人間と、勇者としてじゃなく、一人の少女と扱ってくれた。

嬉しくもあった。同時に嫌だった。

一人のただの人間として扱ってくれることは嬉しい。

同時に私をばかにしているようで嫌だった。

何より、彼は自分のほうが強いからと言って悲しそうな瞳をするから。

「なんでそんな悲しそうな瞳をするの？」

と、彼に聞いたときがある。

そしたら彼は、

「そうか？」

リリカはおかしなやつだな。

リリカ。

俺はな、この世界が大嫌いだ。

でも、リリカがそばにいて悲しいなんて一つも思ったことはないぞ」

そう言った。

嘘だ。

真っ赤な嘘。

だって、そのときもとても悲しそうな瞳をしてるじゃない。いつも、私がないときは悲しそうな瞳をしてるじゃない。

悲しくない。なんて言わないで。

私に隠し事しないで。

信頼してるよ。クラウドのこと。

だから、あなたの悩みを打ち明けて。悲しい、といって。

あの時はそれ以上追求しなかったけれど、なぜ、追求しなかったのだろうと今は思ってる。

クラウドは特別な人間だったけど、神には従わなかった。

クラウドだけが神からの命令に抗うことが出来た。

だから、私は殺されずに済んだ。

私は生まれながらの勇者。

そう言われた。

それはつまり、強いということ。

神は強いもの、罪人を殺させようとする。

勇者は強い。

だから、神に殺される。

特別な人間に殺される。

それが勇者の運命。

クラウドに会うまでは知らなかったことだけど、クラウドが神に操られていたら今頃、私はこの世界にいなかった。

そんなクラウドは神を殺そうとした。

神を殺した。

クラウドは神を殺した。

広大な草原の一部を血の海に変えた。

クラウドと神の血が綺麗な草原の一部を血の海に変えた。

ただ流れる風はクラウドと神の血をどこかに運び、獣と魔物を興奮させた。

でも、興奮をしただけであり、襲い掛かってくることはない。

いま、襲い掛かれれば殺される。

本能が告げた。獣と魔物に。いま、襲い掛かれれば殺されると。

獣と魔物は本能に従う。

故に、獣と魔物はよってこない。

ただそれだけだ。

広大な草原の一部だけ、血の海に染まり、風は血の匂いをどこかへ運ぶ。

血のにおいが気持ち悪い

こんなに近くで血の匂いを嗅いだことはなかった。

なれない血の匂いが気持ち悪い。

こんなにも血の匂いが生臭いものとは思っていなかった。

そんな状況を起こした――クラウドスは神を殺した。

私の目の前で。

神の血を浴びて戦うクラウドスが怖かった。

たまらなく私は怖かった。

血の匂いでその恐怖が、クラウドスと神への恐怖が、自分も殺されないかという怯えという感情が私の中で増す。

クラウドスが神に後ろから何かで貫かれた。

生々しい音か静かな草原の中に響くように音を立てた。

クラウドスから血があふれる。

血の海がクラウドスの血を同胞を求めるかのように飲み込む。

クラウドスは胸の辺りを何かで貫かれている。

頭が真っ白になったかのように、何も考えることが出来ない。

声が出ない。

声のない悲鳴が私の中に響く。

私の声のない悲鳴。

神には聞こえない悲鳴。

神はクラウドスを感情のないような冷たい瞳で見つめるだけ。

脳が真っ白な状態からどうにか起動し、クラウドスの元に駆け寄った。

さっきまで体が動かなかった。

自分の体が石のように重く、力が入らない。

やっと動けるようになっても自分の体、特に足が鉛のように重い。

クラウドの顔全体が見えるように私は顔をうつむける。

クラウドの顔を見たら、今にも死にそうなかおをしている。

ふと、クラウドの傷をみると服は貫かれた部分だけ破れ、その周りを赤黒い血が真っ赤に染まっていた。気持ち悪い。

クラウドはまだ血を流している。

クラウドは後ろから胸の辺りを何かで貫かれ、致命傷を負った。

このままじゃ死ぬ。

私はクラウドを救うことは出来ない。

神に助けを求めることにして声を出した。

「神様、クラウドを助け……いない？」

やっつとで絞りだすことが出来た声。

何も聞こえない。

それもそのはずだった。クラウドを見ていた顔を上げると神がいなかったから。この草原には私とクラウドしかいなかった。

神はクラウドに致命傷を与えると去っていったのだろう。

なんで？ クラウドを助けてよ。あなた達がクラウドに酷いことをするからクラウド死ぬんだよ？ もう、神様のことを嫌いっていわないから。憎いって思わないから。神様を信じる信者になるから……クラウドを助けて。

届かない。神様は戻ってこない。

……届いてよ。助けてよ。クラウドを傷つけないでよ。大事な人を助けてよ……！

はは………戻ってこないよ。

何で神様は私を勇者にしたの？ 何で私の大切なものを奪っているの？ たった一度でいいから、それ以上は何も望まないから、クラウドを助けてよ。

何できてくれないの？

助けてよ……！

涙が私の頬を伝って地面をぬらす。

ぽろぽろと涙が頬を伝う。

止まらない。

涙かためどなく溢れる。

泣かないって決めたのになあ。

「な……くな」

声……？

誰……？

もしかして……クラウド？

クラウドを見る。

今にも死にそうな顔で何かを私に伝えようとしてくる。

喋らないで。

「……しゃべらないで。クラウド」

ぜえぜえと息をはきながら私に話しかけてくるクラウドはとても

辛そうで、痛々しい。

見たくない。

こんなにも苦しんでるクラウドを見たくないよ。

今にも死にそうなクラウドの声を聞きたくないよ。

「エリスに………伝え……たい……こ………とが………ある」

ぜえぜえと話しかけてくるクラウド。

やめて。

「しゃべらないで!! しんじょうからあ………」

涙でうまく前が見えない。

私の顔はぐしゃぐしゃですごく不細工だろう。

でも、そんな姿をさらしても、クラウドには生きてほしい。

一人はいやだよ。

クラウドがそばにいてほしいよ。

お願いだから死なないで。

消えないで。

「いいか……よくき……けよ。一度……し………かい………わない
……から………な」

何でそこまでして私に何を伝えようとするの？

しゃべらないで。

傷ついてるんだから。

私じゃ、あなたを救うことが出来る治癒魔法を使うことが出来ないから。

あなたを救えないことが悔しい。

生きてほしいのに。

クラウドに生きてほしいのに。

なのに……救うことが出来ない。

悔しい。

誰か、クラウドを助けて……。

「リ……リカ」

クラウドが私の名前を呼んだ。

「ねえ、クラウドは何でそこまで私に何かを伝えようとするの？」

「……それ……は、た……いせ………つな………こと、だ………か、
ら………だ」

死にそうなのに言葉をつむぐ。
私なんかに関係を伝えるために。
私なんかに関係なことを私に伝えるために。
どうして、私なんかに関係なことをするの？

「クラウドス……」

名前を呼ぶ。

何がしたいかなんて私でも分からない。

自分の頭の中はぐちゃぐちゃで、めっちゃくちゃだ。

ただ、呼びたかったのかもしれない。

何かを伝えたいのかもしれない。

分からない。

でも、それが一番いいと思った。

今、冷静だったら、私はなんで混乱していないの？

クラウドスのことをそこまで大切に思っていないんじゃないの？

と、思えてくると思ったから。

「……リリカ、今から言うことをちゃんと聞け」

クラウドスが弱弱しい声で、でも、鋭さのある声で私に話しかけてきた。

途切れ途切れではなく、ちゃんと私に伝えたいことが伝わるように途切れ途切れではない喋りをするクラウドス。

辛いはずなのに。

なのに、それを感じない。感じさせない。そんな風に喋りをしたクラウドス。

「特別な人間は前の特別な人間の記憶を持っている。

俺も持っていた。

前の特別な人間は神の駒として一生を終えた。

前の特別な人間には愛するものがいた。

しかし、愛するものは特別な人間を恐れた。

前の特別な人間は一生、孤独のまま寿命を向かえて死んだ」

「それは私に伝えたかった大切な話？」

「ああ。神は俺を殺したあとに特別な人間をまた作るだろう。

もう、俺は死ぬ。

助からないだろう。

だから、新たな特別な人間を支えてやってほしい。

頼まれてくれるか？ リリカ」

頭を縦に振った。

クラウドの頼みごとを断るわけにはいかない。

はじめてクラウドが私に頼みごとをしたんだ。

強いから。自分は何でも出来るから。と言って、私に頼みごとをしなかったクラウドが私に頼みごとをした。

「クラウドがもし、死んだときは私が次に生まれてくる特別な人間を支える」

クラウドには死んでほしくない。

でも、もう、分かっている。

クラウドはもう、死ぬしかないんだって。

だから、だから……クラウドの願いを叶えてあげたい。

他人を思う願い。

クラウドは優しい。

自分が死ぬのに助けてとも言わず、他人を支えろというのだから。

「リリカ。

俺はお前といて楽しかった。

きつと、この記憶は引き継がれるだろう。次の特別な人間に。そいつは俺だ。

俺の記憶を持っているのなら……俺だ。

だから、次の特別な人間も俺だ。

だから、次の俺と仲良く、そして、俺を支えてやってくれ」
「分かった。

クラウス、私のこと……忘れないでね」

「ああ。忘れない。

俺がお前のことを忘れるなんて……ありえない」

「口説いてるの？

死にそうにもなって口説くなんてひどい」

苦笑。

いまさら口説くなんて。

遅いよ。

もっと前に。

もっと前に口説いてくれていれば躊躇うことはあったと思うけど、
はいつて返事をしたと思う。

でも、今その約束をしたら、もっと、悲しくなる。

「そう聞こえるか？

じゃあ、そうしておこう。

だから、早く俺を見つけてくれ。

頼んだ。

俺を見つけたとき……返事をくれ」

「分かった。

そのときに私の答えを言う。

いくら時がたとえとクラウス……あなたを探す」

「そうか……

さよならだ。

また……会おう」

クラウドが目を閉じた。

クラウド胸に手を当てた。

鼓動を感じなかった。

心臓が動いている証拠になる鼓動が。

「……クラウド。

また、会おう」

何年たとうと私はあなたを見つけてみせる。

神を殺してさえもあなたを支え、あなたを助ける。あなたを死なせはしない。

クラウド。

あったら私は言うわ。……あなたのことを愛してる。

絶対にもう、離さない。

あなたを思っ生きてゆく。

クラウドと特別の歴史（後書き）

百合か！？

と思った皆様。

前にも書いていますが（書いていると思いますが……書いてなかったらすいません）百合はないです。

リリカさんの過去暴露。

勇者リリカ。

最強クラウド。

チートだ。

リリカさん。乙女だ。

恋する乙女は強いのだ。いつかりリカのセリフに入れたいです。

いや、恋しなくても強いですけど。最強ですけど。

色々ともあ、設定してるうちにこんなに長く……。

誤字、脱字等……連絡お待ちしてます。

ここをもっと良くしたほうがいいんじゃないか。という意見も募集です。

私には文才がないので色々聞き中です。

今のところ、五感と背景描写が甘いとの意見。があるので色々今までを修正し、読みやすい小説を目指してます。その為、私は皆様の意見は必要不可欠と思っているので意見をもらいたいです。

感想も喜んで返信させてもらいます。

遅れてすいませんでした。

活動報告に色々な異天に関する話を書いていますので（ネタばれ無し）よろしければ見ていただけると嬉しいです。コメントもお待ちしています。

生きる。(前書き)

遅くてすみません。

生きる。

そんな……。

私は特別な人間……？

私は神に操られる人形になって、人を殺してしまうの？

「……ねえ、リリカ……。私は……人を……」

声が震えて途切れ途切れになる。

おびえている。

だから、その次の言葉が出ない。

覚悟が出来ないから。覚悟することが怖い。まるで、人を殺しても、何も感じないと認めてしまうように。

言えない。言いたくない。覚悟なんて……出来ない。

でも、言わなきゃいけないから。聞かないと分からない。

だけど……。そうだ。といわれそうで怖い。

人を殺したくない。

「何かしら？ 質問なら受け付けるわ」

リリカが、声をかけてくる。

質問したいことはある。

でも、それを聞けない。

怖い。

どうしようもなく。

「あなたは何に迷っているの？」

私の心情に気づいたのか、リリカが私に聞いてくるけど、言えな

い。

「あなたは神に操られて、自分が人を殺すと思っているの？」

リリカが行ったのは私の言いたかったこと。聞きたかったこと。それを聞いてくる。

ゆっくりと、うつむくように、首を縦に振った。

私は人を殺すのか、殺さないのか。

そればかりを考える。

私にはその判断が出来ない。

だって、何も知らないから。特別な人間の核心の部分は分からない。特別な人間に出会った事が無いから。

「だったら、よく聞きなさい。あなたは神に操られたりなどされていないわ。

神に操られていたら、真っ先に私を殺しにくるでしょうから。

あなたが人を殺すときは、己の意思で人を殺すの」

体が硬直する。

嬉しいけど、リリカの言った、私が人を殺すときは、私の意志で人を殺すという言葉が、引っかかる。

でも、その言葉は人を殺すときは殺す覚悟をしろとも聞こえる。

殺すことは無い。殺したくない。

私は人を殺さない。殺されそうになったら、自分が死ぬことで人が救われるのなら、私はその命を差し出そう。後者なら喜んで。

私は人を殺すつもりは無い。これからもその気持ちは変わらない。きっとそうだろう。

殺される覚悟なら、してる。

殺す覚悟が、ない。

「一生、人を殺すつもりはないのでしょね。覚えておきなさい。」

あなたはただの人間と変わらないわ。

神に操られず、人を殺さない。

与えられた大きな力も振るわない。

なら、あなたはただの人間と変わらないことを。

そのことを……胸に刻んでおきなさい」

どくん。と音が鳴った。

私の鼓動の音。

それが私の生きていることを証明した。

でも、いまは関係ないのだけれど。

妙に、大事なものと思えた。

「では、後は好きなように生きなさい。

あなたと私をつなぐ鎖は――

ないのだから」

いつの間にか、使い魔の契約は切れていた。

いつ行ったかは知らないけど。

でも、リリカが自由になったことは、嬉しい。と素直に感じるこ
とが出来る。

それが、私が人間だということを感じさせた。

――ただの人間――特別で無いようで特別なもの。

昔の特別な人間達は私のように、ただの人間を望んだのだろうか？
わからない。

でも、それはきっと。昔の特別な人間達、それぞれのものだ。

世界を見て周ろう。

ただの人間として。

この、大きな、壮大な夢が覚めるまで。

「リリカ。私はこの世界を見ていくよ。さよならだ」

最後にさよならをリリカに告げる。

歩き出す。

まだ見ぬ、珍しいものを求めて。

生きる。(後書き)

大一部分的な部分は終了です。

結局、新キャラちゃんの名前は出てきませんでしたが出したかったけど、出す機会も無く終了です……。

まだ、新キャラちゃんはこの話を夢だと思っています。正直、このまま夢落ちでもいいんですけどね。目が覚めた。また、あの絶望的な世界へ戻ろう、生きていこう。みたいなエピソードを書いてという。やな終わり方です。

次回はリリカがメインにする予定です。それか、美子です。

眠ろう。(前書き)

美子ちゃんです。

眠ろう。

キメラたちを倒した私は探した。

どこにいるのかな？

……私は誰を探してるんだっけ？

あれ？ 誰？ 私は誰を探しているの？

その時、何かが私に飛び掛ってきた。

避ける。そして、蹴る。命中。……したのに何で？ なんで、物

の感覚がしない。物に触れたという感覚が無い。

敵を見る。敵を観察する。

キメラ……っぽいやつじゃない。もっと別の……あれはなに？

黒い靄でできた真っ黒な何か。

キメラより、強い。ずっと。

本能が告げる。逃げろと。私には勝てる相手ではない、と。

でも、逃げるわけにはいかない。

今までだって、逃げたことなんて無いから。

強くなりたい。その為に、力を手にしようとしたのだから。

だから、私が勝てないからって、逃げるわけにはいかないの。

逃げなくて、あのへんな黒い靄に殺されてもいい。

後悔しないのなら、どんな死に方だって受け入れてみせる。

だって、後悔するよりはマシでしょう？

私が死ぬときは後悔なんてしたくない。

だから、自分のしたいように行動する。自分のしたいように生きるわ。

だから、黒い靄から逃げない。

殺されても、殺されなくても、受け止める。

それぐらい、それほどまで好き勝手生きてるんだから、後悔なんて無い。

「いいよ。受け止めてあげる」

そういった瞬間。

襲い掛かってきた。黒い靄。

逃げない。避けない。

受け止める。

あんたを受け止める。

殺してもいいよ。それぐらい、受け入れてあげるから。

黒い靄が私を包んだ。

息ができない。でも、苦しくない。

びりびりと電気に感電したような感覚が体に走る。

体が重い。

私の体ってこんなにも重かったのか。

こんな風になってるのに、この黒い靄の中は気持ちがいい。心地よい。

まるで、人のぬくもりのように。

人のぬくもり。

暖かさ。

懐かしい。

懐かしい。この人の暖かさが。

なんでこんなに、この黒い靄は温もりがあるのだろうか？

人の温もりがあるのはなぜだろう？

わからないや。

でも、いつか。

気にせずに、この暖かさを堪能しよう。

眠い。

きつと、久しぶりな人の温もりに安心をして、眠たくなったのだから。

眠ろう。

ずっと、この温もりの中で眠っていたい。

ずっと、目が覚めない。

そんな、眠気。

そんな眠気が襲ってくる。

眠ろう。

ずっと、ずっと、眠っていたい。

誰かを探していたのに、探す気がうせた。

目を閉じた。

眠るために。

「おやすみなさい」

おやすみなさい。

自分にそういうと、意識が薄れ、眠った。

眠ろう。(後書き)

睡眠。

今回の話のテーマではなく、人の温かさです。

睡眠の話じゃなくて、人の温かさの話です。

感想など、もらえたらうれしいです。

サンタクロースさんのお話（前書き）

久しぶりにギャグに戻ってきた感があるのは何故だろう……？
というわけで、ギャグを楽しんでいただけたら幸いです。

サンタクロースさんのお話

目が覚めるとそこは、部屋。
木で作られてる。

ベッドの上に私は寝転がっていて、そばにはタンスがあり、青い花が花瓶のなかに適当に飾ってある。テーブルはなく、狭い。寝るだけの部屋。かなり素朴感が漂っている。

……ここはどこ？
どこなの！？

「ここはどこだー！！」

家具（ベッドとタンス）が揺れた。

いやいや、ちょっと大きな声を出しただけで揺れないですよ。

「おや？ 目が覚めましたかな？」

遠くのほうから声が聞こえた。

年をとったじじ……否、おじいさんの声。

気難しいジジイって感じじゃなくて、優しいおじいさん。見たいな、そんな感じの声。

階段を駆け上がる足音が聞こえた。

いやいや、おじいさんがこんなに速く階段を駆け上がるとか反則でしょ。

ってことは……、

「おお、目が覚めましたか」

おじいさんなんだ……。

ベットから体を起こして、おじいさんを見つめる。

白いひげ（かなり長い）、白い頭（くるくるしてる）、サンタクロース！ サンタクロース！

「サンタクロース！」

「おや、私の名前をしていたのですか」

名前なの！？

長い名前だねー。変だねー。

はは、親の顔が見てみたい（いや、そこまで変ってわけじゃないけど）。

だけどさ、普通かなり驚くべきシーンであんまり驚いていないおじいさん、すごいよ。

「はてさて、何で私の名前を知っているのですかな？」

黒い笑みに見えてしょうがないのは何故だろう？

じい……。私はこの老人をあなどっていたのかも知れない。こんな、恐ろしい黒い笑みを浮かべることでできる人はそうそういない。ましてや、老人。威厳があるんだな。

しかし、こんな威厳どうってことない。いつもこれ以上に辛い視線を友人達に受けていたのだから（傲慢じゃないけど）。

「……見た目」

「度胸あるのう。お主、わしの威圧に耐えるとは」

「いつもお友達にもっと痛い目線を受けてたらこうなるのはしょうがないです」

「……、友人もまた、度胸のあることじゃ」

ぼそりと呟きやがった。

まあ、全部聞こえてますけど。聞こえちゃったけど！
放置するわけにも行かないので……、

「なんで？ 私、そんな怖い人じゃないんだから、度胸も何もいら
ないでしょ？」

といました。

怖い人じゃないよ！

怖い人じゃないんだよ！！ すっごく、見た目も中身も優しいよ
！！

「いや、お主の持つ力が恐ろしいほど強大なんじゃ」
「へー、すごいね」

無関心。

ありえないし。

ありえるわけないんだよ。だって、前に一度何もないところで転
んだ！ 体力とかあるよ？ 運動神経すばらしいよ。でも、転んだ
んだよ！ ドジッ娘なんだ！
うう……悲しくなってきた。

「主……、何でそんなに無関心？」

「あ、ああ。なんとなく。どうでもいいからねー」

「……」

無言で返さないで！ 悲しくなるでしょ！
その沈黙が辛いから！！

「まあ、いい。」

一応、無関心じゃが、己の力についてを知っておいて損すること

はない。知らなければ困ることがあるかもしれんし、一応、聞い
け」

「うん、わかった。それと飲み物が欲しいんだけどな……」

のどが渴いてしょうがない。

ずっと寝てたからかもしれないけど。

そういや、何で私生きてるんだろう？

黒い靄に包まれてたのに……。

まあ、いいや。

知らなくてもいいことだろうし。そうだと信じたい。

「わがままじゃのう。いいじゃろ、持ってこよう」

口うるさい姑よりかはマシだと思うけどなあ。まだ姑のような婆ババアになるつもりはないよ。

それより、このサンタ（おじいさん）が飲み物を持ってきてくれるらしい。

始めてきた人に冷蔵庫からとってきてー。だけで分かるわけなし。

目の前には、だれもいない。

サンタが飲み物を取りにいつている。

その間に色々と整理しておこう。

一、私は黒い靄の中で死を覚悟で寝た。

二、目が覚めたらベットに横たわって寝ていた。

三、おじいさん（サンタ）がいた。

四、変な話。

……なんじゃこりゃあああ！！ 何の整理もできてないよ。

四番目の変な話ってなに！？ まあ、私が内容覚えてないだけな

んだけど。

サンタさーん！ 助けて！ 私の頭は容量オーバーで爆発します！ 爆発したら死ぬけど、死ねないよ。死にたくないよ！

……、なんか矛盾してるね。

状況整理が整理じゃなくて（その逆）、整理できずに、散らかってきたよ。

やめよ。まともに考えよう。

推測だけど、黒い靄からあのサンタが助けたのだろう。……助けなくて良かったよ。本当。死んだら死んだでしょうがないんだし。それで、私が気絶してたから、この部屋につれてきたのだろう。それで目が覚めたので飛んでやってきた（実際に飛ぶとは思えないけど）。

謎が謎を呼ぶ……。という、感じでもなさそうだし。

気づいてなかった謎が増えた？ いや、変わってないか。

首を光速的速度で左右に振る。やば、目が回ってきた。虚ろな感じ？

「飲み物と一応、薬を持ってきたが……。なにやつとるんじゃあああ！！」

「うん？ うるさいよ。サンタさん」

光速的速度で首を左右に振っているときにサンタが戻ってきたので首を左右に振るのをやめた。

それにしても、声が大きいなあ。若者に負けなくらいの元気があるもんで。

「おー、どんな味？ そして、何の薬？」

「飲み物に使っている果物の名か？ これは、クワシの実じゃ、薬は体力増強じゃな」

「異世界だし、名前の良く分からない果物が出てくることはいいよ。

まだ、分かる。だけど……、なんで体力増強の薬が必要なの!？」

私は天才だよ!？」

だからさ、体力とか普通に常人を超えてますよ!？」 天才とか理屈になってないけどさ。

とにかく、一日ぐらい寝ても、体力が多少は落ちても、普通に常人より上いけるよ!？」

「一日ぐらいなら使わなくて良かったじやろうが……。おぬしは、一ヶ月間、ベットで寝たきりじゃった。体力など、かなりの昔に老人並みだろうよ」

「はああああああ!？」

な、なんつー睡眠時間。どれだけ疲れがたまってたのさ。そういうことじゃないだろうけどね。

一ヶ月だよ! 一ヶ月! 一ヶ月間ずっと眠ってたんだよ。

「まあ、これを飲めば体力なんぞ、すぐ元に戻る。

しかし、問題なのはおぬしの言った言葉じゃ」

「何が!？」 一ヶ月間眠っていたことより重大な問題があるというの!？ ……、ごめんなさい、調子に乗りました」

いや、だって急にサンタの手のひらに炎は現れたんだから。

かなり高い温度なのか、向かい合っているだけでかなり熱い。

こんな炎を目の前で見せられれば、普通に頭が炎の熱に冷やされたかのように（普通は熱くなるのだろうけど）冷静に頭が冷えてきた。

しかし、一番怖いのはこの炎じゃない。

サンタだ。

サンタクロース様の威圧あり、殺気あり……。そんなかなり怖い、

黒い笑みを見せられては本能が警報をあげるわけでした。冷静になれっていつてくるわけでした。恐ろしい。

「では、問題をいおうかのお」
「はい」

ねえ、怖いから。怖いからその黒い笑みやめて。目が全然笑ってませんから。ついでに炎を消して！
そんな視線をサンタに送るが気づいてくれない。鈍感め！

「まず、といっても、一つだけじゃが、おぬしが異世界といったことじゃ。」

おぬしの口調から察するに、お主……、異世界からきたものだろう。

どうやってきたかは知らぬ……。だが、いえることは一つだけある。それは、おぬしが女神ということじゃ」

勘違いされてませんか？

女神？

私は人間です。断じて女神などではありません。

異世界にこれたのはあるお人につれてきてもらったからです。

もし、異世界を行き来できるのが女神のなら、それはリリカ・ルーシイベルでしょう。

だから、私はただの人間。

貴方は勘違いされた人です。

天才でも、いくら天才でも、それは常人——（ようは人）と比べたらっただけで、女神とかいわれるようなすばらしい力は持っていません。

「女神、われを助けてはくれぬか」

追い討ち掛けるかのようにそんな言葉、言わないで。
ため息を一つ。大きく息を吸い込んで息をはいた。

サンタクロースさんのお話（後書き）

誤字、脱字などあれば教えていただけるとありがたいです。
感想、意見、その他、色々いただけると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3409s/>

異世界と天才（?）

2011年12月15日22時47分発行